

第三章 遺跡

1 遺跡の概観

調査区は、もと水田で、一部は金魚の養魚地に利用されていた。水田の畦畔には平城京の条坊地割が良好に遺存している (PL. 1・2, Fig. 5)。

* 奈良時代の遺構検出面は、標高 52.9~53.3m で、東南へ低くなるが、ほとんど平坦地といってよい。調査区の西北から東南に向かって、蛇行をくりかえした数条の奈良時代以前の自然旧河川が埋没している。旧河川堆積層中には十四坪で少量の弥生土器の小片がある以外はほとんど遺物を含まない。なお、調査区の随所で、遺構面下約 1.3m に洪積世末期のミツガシワ層 (厚さ 20~50 cm) を確認している。

* 遺構検出面は、基本的に黄褐色の地山で、砂質のところが多い。旧河川の部分は、青灰色の細砂あるいはシルトとなる。全域が後世の削平を受け、奈良時代の地表面は残っておらず、大部分の遺構は同一面で検出した (Fig. 12)。

遺構の時期区分は、遺構の重複や配置関係、出土遺物の年代などを手がかりにしたもので、奈良時代をⅠ~Ⅳ期の4時期に分けた。

* 調査区は、坪境小路をはさんで、北の十四坪、南の十三坪にまたがり、両坪ともに多数の遺構がひろがる。奈良時代前半 (Ⅰ・Ⅱ期) には、十四坪に鑄造・漆工の工房が営まれ、十三坪には官衙風の建物を配置する。奈良時代後半 (Ⅲ・Ⅳ期) には両坪とも宅地になる。

このほかに例の少ない地鎮具や胞衣壺を埋納した遺構もある。

溝や井戸、土坑等には土器をはじめとする多量の遺物があり、特に鍛冶具、漆容器など工房関係の遺物はこの遺跡の性格をよくあらわす。

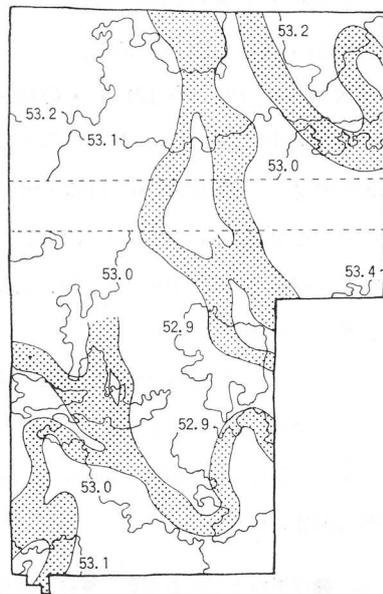
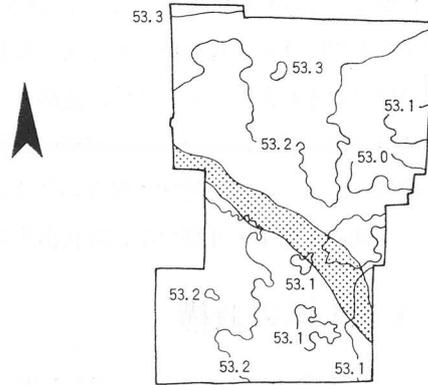


Fig. 12 調査区の地形 (網は旧河川 1:1250)

2 遺 構

報告の対象となる地域が広大なので、遺構の位置表示等についてあらかじめ触れておきたい。

今回報告する発掘調査地は、平城京右京八条一坊の十三坪と十四坪にまたがっている。そこで、調査区をまず十三坪地区と十四坪地区とよびわけると、十三坪地区は第168次南調査区および第168次北調査区の一部であり、十四坪地区については、発掘区が南と北に分断されるため、* さらに十四坪南区（第168次北調査区の大部分）、十四坪北区（大和郡山市、第156-32次、第179次の各調査区）とよびわけると。

奈良時代の遺構としては、塀・建物・溝・井戸・土坑などがある。これらのうち、築地塀を除く塀、及び建物のすべては、掘立柱構造である。したがって、以下の記述においては、単に「建物」あるいは「塀」と称することにし、特に掘立柱であることをことわらない。また、建物・塀・溝等の遺構の多くは、国土方眼方位（第VI座標系）に近い方位をとっている。特に振れ等に言及しない場合は、この方位におよそ則っているものと理解されたい。

建物規模に関する記述は、まず「東西」「南北」の柱間数と総長をメートル法でカッコ内に記し、つぎに桁行・梁間方向の柱間寸法および庇の出を尺で記す。なお、検出した建物の柱穴に柱根もしくは柱痕跡が残っているものが少なく、柱位置を正確におさえることが困難なため、* まず復原柱間寸法を尺単位でおさえ、総長は1尺を0.3mとして換算した。¹⁾

遺構の記述にあたってはまず、遺構を4時期に区分し、およそ道路・建物・塀・溝・井戸・土坑の順に記述し、そのあと、井戸の詳細、土器埋納遺構について記述した。ただし、関連する遺構は、まとめて記述する場合がある。なお、別表1・2も参照されたい。

4時期のうちI・II期は奈良時代前半にあたり、III・IV期は奈良時代後半にあたる。*

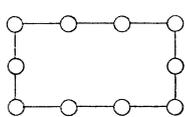
A I期の遺構

I期に属するおもな遺構は、建物39棟、塀13条、築地塀3条、井戸8基、溝9条である。なお、I期に属する溝のうちSD1345、1384、1398、1484、1547、1583は、建物群に先行し、I期でもごく初期に限定される遺構である。

SF 2000 (PLAN 4・6; PL. 9・12) P・Q地区 *

十三坪・十四坪間の坪境小路である。当初の側構はSD1496・SD1499で、後に溝の付け替えによって道幅が広がり、側構はSD1495・SD1500にかわる。当初の南北側構の心心距離は3.3m(11尺)で、路面幅は1.8m(6尺)である。溝の付け替え後の南北側構の心心距離は3.9m(13尺)で、路面幅は2.4m(8尺)である。

SB 1309 (PLAN 7) Q地区 *



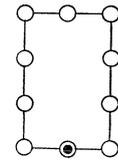
十三坪地区の南辺に位置する東西3間(6.3m)、南北2間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は7尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺60cm前後の不整形である。柱穴の重複関係からSB1312より古い。

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ●柱痕跡をとどめる掘形 ○抜取痕跡あり ○掘立柱柱穴
……推定(すべて方位は上が北、縮尺約1/300)。挿図の縮尺はFig.21が1/20、他は1/40。

SB 1324 (PLAN 5) Q地区

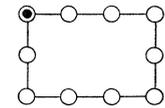
十三坪地区の東南に位置し、十三坪を東西に2分する道路 (SF 1320) 上に建つ東西2間 (3.3m)、南北3間 (5.4m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は5尺等間である。柱穴は一辺80cmの方形で深

- * さは32cmである。妻柱の柱穴は身舎にくらべやや小さく、約60cmの方形である。SB 1340・SA 1355と重複し、柱穴の重複関係から双方より古い。また東側柱は、十三坪を東西に2分する道路の西側溝 (SD 1319) の底で検出した。したがって、SB 1324は十三坪を東西に2分する道路がつくられる以前の建物である。



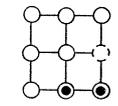
SB 1327 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の南寄りほぼ中央に位置する東西3間 (4.95m)、南北2間 (3.3m)の東西棟である。柱間は桁行(東西)方向・梁間(南北)方向ともに、5.5尺等間である。柱穴は、一辺70cm~80cmの方形である。柱穴の重複関係からSB 1327は、SB 1326より古い。



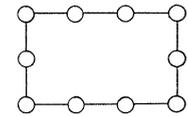
SB 1331 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の南辺に位置する東西2間 (2.7m)、南北2間 (3.0m)の南北棟の総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は4.5尺等間である。柱穴は一辺60cm~70cmの不整形である。柱穴の重複関係からSB1330より古く、SD 1345より新しい。



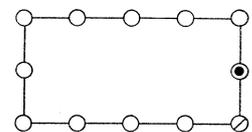
SB 1364 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の南寄りに位置する東西3間 (5.85m)、南北2間 (3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺50cm~80cmの不整形である。SB 1364は柱穴の重複関係からSB 1363より古い。建物内に井戸 (SE 1365)があり、井戸掘形が柱穴より新しく、建物と井戸とは同時併存または建物が井戸に先行すると考えられる。



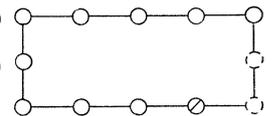
- * **SB 1381 (PLAN 7 ; PL. 8) Q地区**

十三坪地区の中央に位置する東西4間 (8.4m)、南北2間 (4.2m)の東西棟である。柱間は桁行(東西)方向、梁間(南北)方向ともに7尺等間である。柱穴は一辺70cmの丸みをおびた方形である。



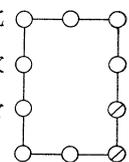
SB 1390 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区のほぼ中央に位置する東西4間 (9.0m)、南北2間 (3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は7.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いである。柱穴からは平城宮土器IまたはIIの土器が出土した。柱穴の重複関係からSB 1391より古い。

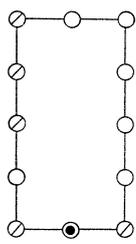


SB 1404 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の西辺北寄りに位置する東西2間 (3.6m)、南北3間 (5.4m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向ともに6尺等間である。柱穴は、隅柱が大きく一辺約60cm、他の柱では一辺約40cmである。柱穴からは平城宮土器IIIの土器が出土した。

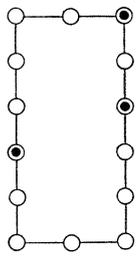


SB 1405 (PLAN 7) Q地区



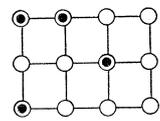
十三坪地区のほぼ中央に位置する東西2間(4.2m)、南北4間(8.4m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向ともに7尺等間である。柱穴は約80cmの方形または不整形である。柱穴の重複関係からSB1405はSB1402より古い。柱穴は、十三坪を東西に4分する塀SA1434より古く、SB1405は十三坪が小規模宅地化される以前の建物である。

SB 1425 (PLAN 6 ; PL. 11) Q地区



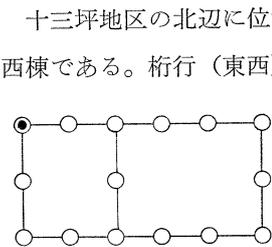
十三坪の北辺西寄りに位置する東西2間(4.2m)、南北5間(9.0m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は7尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いである。東側柱の南から4目目の柱穴に柱根が残っており、柱直径は約10cmである。柱穴の重複関係からSB1425は、SB1482より新しい。また、SB1425の柱穴はS字状の溝(SD1484)の埋土より新しい。

SB 1471 (PLAN 7 ; PL. 10) Q地区



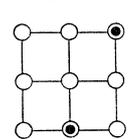
十三坪地区の東北隅に位置し、十三坪を東西に2分する道路(SF1320)の東の区画に建つ。東西3間(4.95m)、南北2間(3.3m)の東西棟の総柱建物である。桁行(東西)方向の柱間は5.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱痕跡の直径は18cm前後である。柱穴の重複関係からSB1471はSB1470より古い。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SB 1476 (PLAN 6 ; PL. 11) Q地区



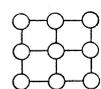
十三坪地区の北辺に位置しSB1478の南東に建つ東西5間(9.3m)、南北2間(4.5m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から7尺・6尺・6尺・6尺・6尺、梁間(南北)方向の柱間は7.5尺等間である。桁行方向に東3間と西2間に間仕切り位置に、間仕切り柱が立ち、建物を桁行3間と2間に分つ。柱穴の形状は不揃いで、規模は40cm~80cmである。柱穴の重複関係からSB1476は、SB1477・SB1478より古い。またSB1475と重複するが、柱穴の重複はない。西北隅に柱痕跡をとどめる。

SB 1480 (PLAN 6) Q地区



十三坪地区の北辺のSB1482の東に位置する東西2間(3.6m)、南北2間(3.9m)の南北棟の総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺80cm~1mの方形である。

SB 1482 (PLAN 6 ; PL. 11) Q地区



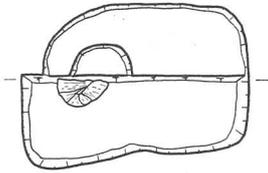
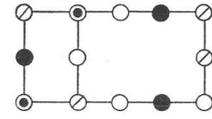
十三坪地区の北辺に位置する東西2間(2.7m)、南北2間(2.4m)の東西棟の総柱建物である。桁行(東西)方向の柱間は4.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は4尺等間である。柱穴は平面規模のわりには大きく、一辺約80cmの不整形である。柱穴の重複関係からSB1482は、SB1425より古い。柱穴からは平城宮土器Ⅱ以降のものと思

われる土器が出土した。

SB 1532 (PLAN 4; PL. 15) P地区

十四坪南区の東辺に位置し、SB 1531 の北に平行して建つ。東西4間(7.05m)、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は

- * 東3間が5.5尺等間、西1間が7尺、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。桁行方向西から1間目で間仕切るように見え、西1間のみ柱間が異なり、西にさしかけの庇を付けていた可能性も考えられる。柱穴は、一辺80cm前後の方形であるが、西1列のみ一回り小さく一辺60cm前後である。柱根は南側柱の東から2つ目と北側柱の東から2つ目、西妻中央柱に残る。南側柱の柱根は直径12cm、西妻の柱根は10cmと西妻柱は一回り小さい。



W H53.8m E

SB 1537 (PLAN 6) P地区

十四坪南区南辺の中央に位置する門である。十四坪の南を区画する築地堀(SA 1540)に開き、桁行1間(3.3m 11尺)である。控柱は検出されず棟門形式の門と考えられる。柱穴は東西1m、南北70cm~80cmの長方形で、柱穴の東面は斜面となっている。残存する柱根の直径は24cmである(Fig. 13)。

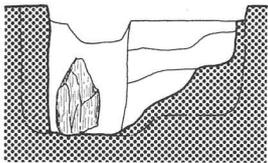
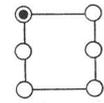


Fig. 13 SB 1537の柱根

SB 1543 (PLAN 4) P地区

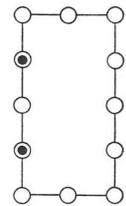
十四坪南区の南辺中央に位置する東西1間(2.7m)、南北2間(3.0m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は9尺等間である。柱穴は一辺約40cmの方形である。SB 1539と重複して建つが、柱穴の重複はない。



SB 1553 (PLAN 4; PL. 14) P地区

十四坪南区の東北に位置する東西2間(3.6m)、南北4間(7.2m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向とも6尺等間である。柱穴は一

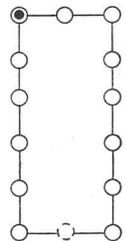
- * 辺60cmの方形である。柱穴の重複関係からSB 1553は、SB 1554より古い。



SB 1559 (PLAN 4; PL. 13) P地区

十四坪南区の中央東寄りに位置し、十四坪西半の区画の東を限る南北堀SA 1558と重複して建つ。東西2間(3.6m)、南北5間(8.7m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は、南から6尺・6尺・6尺・5尺・6尺、梁間(東西)方向の

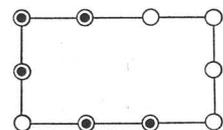
- * 柱間は6尺等間である。柱穴は小さく、一辺約40cmの方形である。柱穴の重複関係からSB 1559は、SA 1558より古く、SK 1982を仲介とした重複関係からSB 1561より古い。柱穴からは平城宮土器I~IIの土器が出土した。



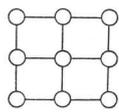
SB 1576 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の中央に位置する東西3間(5.85m)、南北2間(4.2m)の

- * 東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は7尺等間である。柱穴は一辺70cmの方形である。柱穴の重複関係からSB 1576はSB 1575・SB 1577より古い。

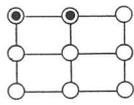


SB 1580 (PLAN 6) P地区



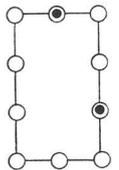
十四坪南区の北辺中央に位置し、十四坪を南から4分する塀 SA 1571 と重複し、十四坪が1/16もしくは1/32町に分割される以前の建物である。東西2間(3.6m)、南北2間(3.3m)の東西棟の総柱建物である。桁行(東西)方向の柱間は6尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺40cm前後の隅丸方形である。*

SB 1582 (PLAN 6) P地区



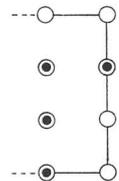
十四坪南区の北辺に位置する東西2間(4.2m)、南北2間(3.0m)の東西棟の総柱建物である。桁行(東西)方向の柱間は7尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5尺等間である。柱穴は、一辺40cm前後の不整形である。

SB 1586 (PLAN 6; PL. 13) P地区



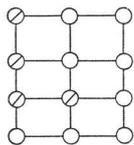
十四坪南区の西辺に位置し、SB 1587 の東北に重複して建つ。東西2間(3.3m)、南北3間(4.85m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺50cmの方形または不整形である。*

SB 1588 (PLAN 6; PL. 13) P地区



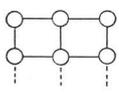
十四坪南区の西北隅に位置し東西1間(2.4m)以上、南北3間(6.3m)の南北棟である。検出したのは、1間(8尺)×3間(7尺等間)であるが、おそらく桁行3間の南北棟の東庇と思われる。柱穴は一辺60cm~70cmの方形である。柱穴の重複関係から SB 1588 は、SB 1585 より古い。*

SB 1609 (PLAN 3) O地区



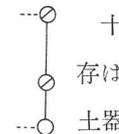
十四坪北区の東南隅に位置し、SB 1605・SB 1606 と重複するが、柱穴の重複はない。東西2間(4.2m)、南北3間(4.8m)の南北棟の総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は南から5尺・5尺・6尺、梁間(東西)方向の柱間は7尺等間である。柱穴は一辺90cm前後の隅丸方形で、北妻中央柱穴の底に木製礎盤が残る。柱穴からは平城宮土器ⅡもしくはⅢの土器が出土した。*

SB 1625 (PLAN 3) O地区



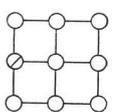
十四坪地北区の南辺中央に位置する東西2間(3.6m)、南北1間(1.5m)以上の東西棟の総柱建物の北1間分を検出した。桁行(東西)方向の柱間は6尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5尺である。柱穴は一辺80cm前後の方形または楕円形である。

SB 1654 (PLAN 3) O地区



十四坪北区の西南隅に位置し、SA 1647 と接するように建ち、SA 1647 との同時併存は考え難い。梁間2間(南6尺、北9尺)の東妻柱列を検出した。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。*

SB 1680 (PLAN 3) O地区



十四坪北区の南方東寄りに位置する東西2間(3.3m)、南北2間(3.3m)の総柱建物である。柱間は東西方向、南北方向とも5.5尺等間である。柱穴は規模・形状とも、不揃いで小さなものは50cm、

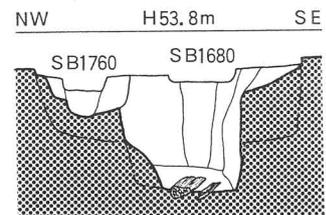
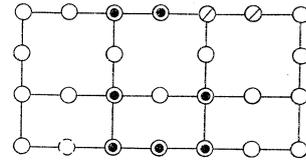


Fig. 14 SB 1680 の礎盤

大きなものは一辺 110 cm もある。柱痕跡の直径は 18 cm で底に木製礎盤をおく (Fig. 14)。SB 1760・SB 1690・SB 1691 と重複するが、柱穴の重複はない。

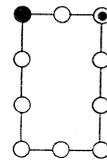
SB 1710 (PLAN 3; PL. 17) O地区

十四坪北区の南辺西寄りに位置する東西 6 間(10.8m)、南北 3 間(5.4m)の南庇付きの東西棟である。身舎の桁行(東西)方向の柱間は 6 尺等間、梁間(南北)方向の柱間は 5.5 尺等間、庇の出が 7 尺である。身舎内の棟通りには、桁行 2 間おきに柱穴があり、桁行方向に 2 間ずつ 3 部屋に間仕切っていたと考えられる。規模が大きく庇をもつ点からみて、SB 1710 はこの付近の中心建物とみてよいであろう。柱穴は一辺 60 cm~80 cm の方形で、柱痕跡は、直径 18 cm~20 cm である。柱穴の重複関係から SB 1710 は、SB 1720 より古い。



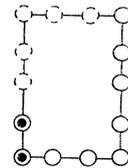
SB 1780 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央南寄りに位置する東西 2 間(3.0m)、南北 3 間(5.4m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は 6 尺等間、梁間(東西)方向の柱間は 5 尺等間である。建物の軸線は国土方眼方位に対して北で東に 2° 30' 振れる。柱穴は一辺 60 cm 前後の方形または不整形で、西北隅柱に柱根が残り、直径は 20 cm である。柱掘形の重複関係から SB 1780 は、SB 1781 より古い。



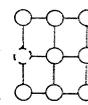
SB 1790 (PLAN 3; PL. 17) O地区

十四坪北区の西南に位置する東西 3 間(3.75m)、南北 4 間(5.55m)の南北棟である。桁間(南北)方向の柱間は南から 4.4尺・5.5尺・4尺・5尺、梁間(南北)方向の柱間は中央間が 4.5 尺、脇間が 4 尺である。建物の軸線は国土方眼方位に対して北で 4° 10' 西へ振れる。柱穴は一辺 50 cm~70 cm の不整形である。



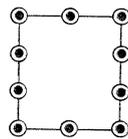
SB 1820 (PLAN 3; PL. 18) O地区

十四坪北区の中央東寄りに位置する東西 2 間(2.4m)、南北 2 間(3.0m)の南北棟の総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は 5 尺等間、梁間(東西)方向の柱間は 4 尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いで、一辺 40cm から 80cm の円形または方形である。柱穴の重複関係から SB 1820 は、SB 1830 より古い。



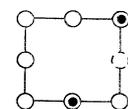
SB 2002 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の東辺北寄りに位置し、SK 2001 の東に位置する。東西 2 間(3.9 m)、南北 3 間(4.5m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は 5 尺等間、梁間(東西)方向の柱間は 6.5 尺等間である。柱穴は一辺 60cm の方形、柱痕跡の直径は 15cm である。

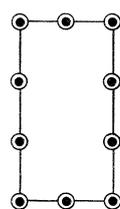


SB 2011 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の中央北寄りに位置する東西 2 間(3.6m)、南北 2 間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は 6 尺等間、梁間(南北)方向の柱間は 5.5 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm~60 cm の不整形で、柱痕跡の直径は 15 cm~20 cm である。柱穴の重複関係から SB 2011 は、SB 2010 より古い。

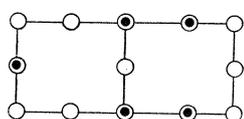


SB 2015 (PLAN 2) O地区



十四坪北区の東北に位置し、SB 2002 の北に棟筋を揃えて建つ。東西 2 間 (3.6 m)、南北 3 間 (7.2m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は 8 尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は 6 尺等間である。柱穴は一辺 60 cm の方形、柱痕跡の直径は 15 cm~20 cm である。SB 2030 と重複するが、柱穴の重複はない。柱穴からは * 平城宮土器 II と III の土器が出土した。

SB 2041 (PLAN 2) O地区



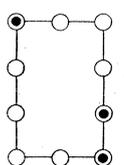
十四坪北区の北辺中央に位置する東西 4 間 (8.4m)、南北 2 間 (3.6 m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は 7 尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は 6 尺等間である。桁行中央の棟筋に柱穴があり、桁行方向に東 2 間・西 2 間に間仕切る。柱穴は一辺 50 cm の方形である。柱穴の重複関係から、SB 2041 は SB 2035・SB 2046 より古い。

SB 2064 (PLAN 2) O地区



十四坪北区の西辺北寄りに位置し、梁間 2 間 (5.5尺等間) の東西棟の東妻柱筋を検出した。直径 40 cm の円形柱穴の中間に直径 30 cm の間柱の柱穴があるが、建物全体を検 * 出していないため、その構造は不明である。それぞれに柱根が残っており隅柱では直径 5 cm (木が痩せており柱痕跡は直径 15 cm)、間柱では直径 7 cm である。

SB 2075 (PLAN 2) O地区



十四坪北区の北辺西寄りに位置する東西 2 間 (3.6m) 南北 3 間 (5.4m) の南北棟 * ある。桁行 (南北) 方向の柱間は 6 尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は 6 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm~70 cm の不整形である。一部の柱穴に柱痕跡があり、柱の * 太さは 約 20 cm である。

SA 1422 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の西辺北寄りに位置する南北塀である。方位は国土方眼方位に対して北で東に振 * れる。7 間分を検出し、柱間はおよそ 7 尺前後で、柱穴は一辺 20 cm~50 cm の不整形である。 *

SA 1432 (PLAN 6) Q地区

十三坪地区の北辺に位置する東西塀である。坪境小路の南側溝 (SD 1495) 心から南に 10 m * の位置に建ち、北の総柱建物群の南を画する。10 間分を検出し、柱間は 6 尺等間、西から 3 間 * 目のみ 9 尺と広くしていることから、出入口と考えられる。柱穴は一辺 50 cm 前後の方形ま * たは円形である。

SA 1465 (PLAN 4) Q地区

十三坪地区の東北隅に位置する東西塀である。西は SF 1320 の東から始まり、東は発掘区の * さらに東へ続く。柱間は 6 尺または 7 尺で、西から 6 間目のみを 11 尺としており、この位置が * 通路と考えられる。柱穴は一辺 30 cm~80 cm の方形である。位置的には、坪境小路 (SF * 2000) の南側溝 (SD 1495) 心から南に 9.0 m に位置し、SB 1471 を囲み東西に細長い区画を * 形成するものと考えられる。SB 1470 と重複し、SA 1465 は、SB 1470 より古い。

SA 1483 (PLAN 6; PL. 11) Q地区

十三坪地区の北方西辺に位置する東西塀である。坪境小路の南側溝南肩から南 7.2 m の位置

にあり、東はSD 1489の西から始まり、西は発掘区のさらに西へ延びる。4間分を検出し、柱間は6尺等間である。柱穴は一边60cm～80cmの隅丸方形である。

SA 1485 (PLAN 4) Q地区

十三坪の東半の区画の北、坪境小路との間にSA 1490の延長に想定される築地塀である。

- * ただし、この付近の瓦の出土量がそれほど顕著でないため、瓦葺の築地ではなく、上土の築地塀もしくは土を積んだ土手状のものと想定される。

SA 1490 (PLAN 6) Q地区

十三坪の西半の区画の北では十三坪北区の北辺中央東寄り、暗渠(SX 1489)が検出されたことからこの位置に築地塀を想定する。なおSA 1485と同様に、上土の築地塀もしくは土手状

- * のものと想定される。

SA 1528 (PLAN 4・6) P地区

十四坪南区の南辺の東西築地塀。十四坪の南辺を区画する施設としては塀SA 1527・SA 1541・SA 1542が検出されたが、これらはいずれも奈良時代の後半に属し、奈良時代の前半に遡る塀は検出されていない。十三坪・十四坪間の坪境小路(SF 2000)は奈良時代の前半から

- * 貫通していたと推定されるから、十四坪の南辺になんらかの区画施設を考える必要がある。そこで、地上まで削平されれば遺構としての痕跡を残さない築地塀をこの位置に想定し、十四坪の東半をSA 1528、西半をSA 1540とする。

SA 1570 (PLAN 4; PL. 17) P地区

十四坪南区中央に築地塀の積土の堰板痕跡と考えられる南北溝SD 1564・SD 1565・SD

- * 1567・SD 1568の存在から、この位置に南北方向の築地塀を推定する。2本の南北溝の心心距離が1.8m、内内距離が1.2m～1.5mであるから、築地塀の基底幅は5尺もしくは6尺と推定できる。南はSA 1528・SA 1540から始まると考えられるが、堰板痕跡と考えられる溝が部分的にしか残っておらず、北はどこまで延びるか不明である。

SA 2005 (PLAN 2) O地区

- * 十四坪北区、SB 2011の東に建つ南北塀である。南はSE 1867の東北から始まり、5間分を検出した。柱間はおよそ6尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いである。

SA 2009 (PLAN 2) O地区

SA 2005の北端から、西へ直角に曲がる東西塀である。3間分を検出し、柱間はおよそ8尺等間である。SA 1850と同じく西側の建物SB 2011の北側柱筋に揃い、SA 2005・SB 2011と

- * 一連の遺構と考えられる。SB 2010とSB 2011の柱穴の重複関係から、SA 1850・SB 2010はSA 2005・SA 2009・SB 2011を建て替えたものと推定される。

SA 2031 (PLAN 2) O地区

- 十四坪北区の東北隅に位置する東西塀である。SD 2043の南3.5mの位置に建つ。西はSK 2001の東から始まり、3間分を検出し、東はさらに発掘区の外へ続くと考えられる。柱間は6
- * 尺等間である。

SA 2034 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の東北寄りに位置する南北塀である。十四坪の北半を東から4分する位置よりやや西にあたる。南のSA 1850・SA 2005とは柱筋が揃わない。南はSA 2009の延長線上の北

1.8m の位置からはじまり、北は SD 2043 の南で終わる。柱間数は 6 間、北端で西に 1 間分曲がり、SB 2041 の北側柱筋に揃う。柱間は 6 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm の方形である。SB 2035 と重複し柱穴の重複関係から SB 2035 より古い。

SD 1345・1384・1398・1484・1547・1583 (PLAN 6・7) P・Q地区

十三坪から十四坪南区にかけて検出された南北溝である。溝状または土坑状に残る部分があるが、本来は 1 本の溝と考えられる。溝は部分的に蛇行し、発掘区を貫く。溝幅は 70 cm から 2.5m、深さは 7 cm～15 cm である。多くの建物と重複し、柱穴との重複関係から、いずれの建物よりも古く、建物群に先行する溝と考えられる。坪境小路側溝との関係は、外側の側溝より古いことは確認できるが、内側の側溝との重複関係は、後の時期の遺構と重複しているため不明であった。十三坪地区の東南部の SD 1345 の埋土は炭混じりの土で、部分的に炭が集中的に入っており、溝廃絶時に投棄されたものと考えられる。

SD 1384 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区中央西寄りに位置し、その位置より十三坪の西半をさらに東西に 2 分する南北溝 SD 1484 とその南の土坑 SK 1398 の続きと考えられる。形状は東西 2.0m 南北 4.5m の縦長である。SK 1384 は SB 1403 と重複し、SB 1403 より古い。

SD 1398 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の東北寄りに位置し、土坑状を呈するが、その位置からみて十三坪の東半をさらに 2 分する南北溝 SD 1484 の続きと考えられる。規模は東西 2.0m～2.5m、南北 7.5m である。北寄りが一段深く約 15cm で南は浅い。柱穴との重複関係から SB 1423・SA 1399 より古い。

SD 1412 (PLAN 4; PL. 10) Q地区

十三坪地区の北辺中央を流れる南北溝である。南は SD 1495 の南肩から約 14.5 m 南の位置から北へ S 字状に流れ、暗渠 (SX 1412) を通り、SD 1496 に流れ込んだものと考えられる。溝幅は 50 cm から 100 cm で南へ行くほど広く、深さは北が一番深く (深さ 13 cm)、南へ行くほど浅くなる。SD 1478 と交差し、埋土の重複関係から SD 1487 より新しい。

SD 1487 (PLAN 4・6; PL. 10) Q地区

十三坪地区の北辺中央に位置するコ字状の溝である。北は SD 1484 に流れ込むように見えるが同時併存したか否かは不明である。そのほぼ中央で南北溝 (SD 1412) と重複し、埋土の重複関係から SD 1412 より古く、築地塀 (SA 1490) が構築される以前の溝である。溝幅は 40 cm、深さは 5 cm である。

SD 1496・1499 (PLAN 4・6; PL. 9) P・Q地区

十三坪・十四坪間の坪境小路 (SF 2000) 側溝にあたる。SD 1496 が南側溝、SD 1499 が北側溝である。SD 1495・SD 1500 に先行する溝である (Fig. 15～17)。溝として検出し得たのは 56ラインより東のみであるが、56ラインより西に検出された土坑群が溝の痕跡と考えられ、当初から南北両側溝は坪境小路を貫通していたと推定される。検出された遺構が、溝の痕跡か、溝が廃絶した後に掘られた土坑であるのか区別は難しく、いずれとも判断しかねるものが多い。確実に溝と判断できる 56ラインより東では、溝幅が約 1.5 m、深さ 40 cm～50 cm である。溝底のレベルは東の方が低く、水は西から東へ流れていたと推定される。南北側溝間中心距離は 6.9m (13尺) である。

埋土から出土した土器は平城宮土器 I～V に属するものである。両側溝からは奈良時代の各時期にわたる土器が出土しているが、平面上で新旧溝および土坑の区別は困難で、出土した土器がすべて SD 1496・SD 1499 に属していたとは断定できない。したがって、奈良時代の後半に属する土器が出土しているものの、奈良時代の後半にも溝として機能していたとは言い切れ* ない。むしろ、SD 1495・SD 1500 が SD 1496・SD 1499 の埋土を掘っているから、SD 1495・SD 1500 が掘られる時には、SD 1496・SD 1499 は埋められて廃絶していたと考えておく。

また、56ラインより西では土坑から多数の輔羽口片、埴塼片等の 铸造関係遺物が出土したが、土坑を溝の痕跡とみるかどうかに関係があり、铸造関係遺物が SD 1496・SD 1499 に伴うものであるか否かは断定できない。

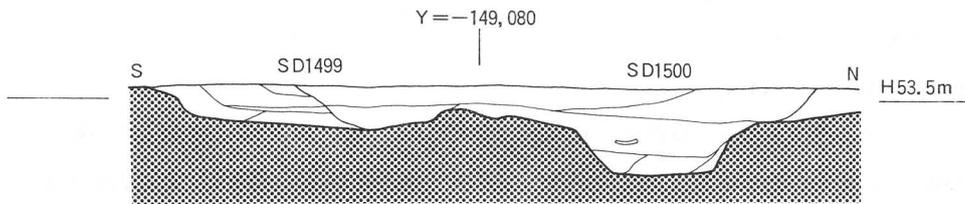


Fig. 15 SD 1499・1500 断面図

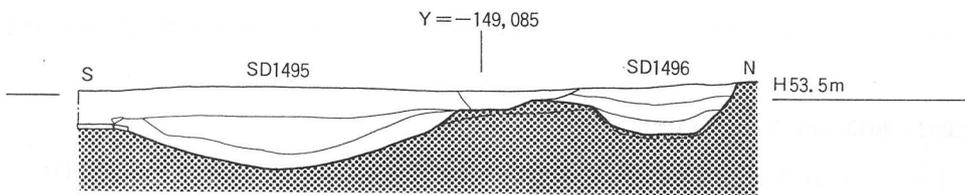


Fig. 16 SD 1495・1496 断面図

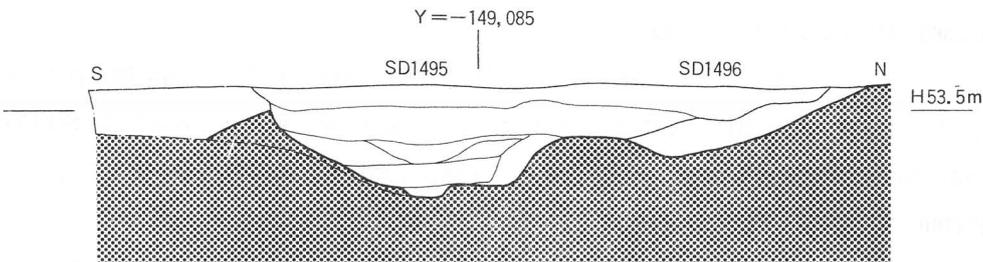


Fig. 17 SD 1495・1496 断面図

* SD 1568・1567・1565・1564 (PLAN 4; PL. 17) P地区

十四坪南区の東方に位置する南北溝である。SD 1567・SD 1568, SD 1564・SD 1565・SD 1568がそれぞれ1本の溝と考えられ、溝心心距離は1.8mである。SD 1568 は SD 1569 の下層で検出され、幅 20 cm で東側が垂直に掘られ、深さは 18 cm であった (Fig. 18)。溝幅が細く片側が垂直に掘られていることから、この溝は SF1970に先行する築地塀(SA1570)を造る

* 際に、積土をおさえるため
の西側の堰板痕跡と考えられる。SD 1583 からは平城宮土器IIまたはIIIの土器

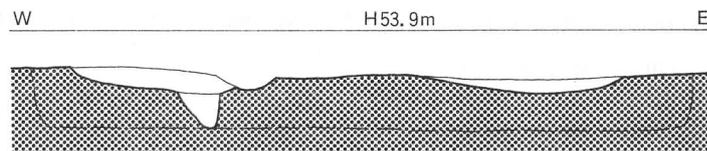


Fig. 18 SD 1568 断面図

が出土した。

SD 1860 (PLAN 3; PL. 18) O地区

十四坪北区の中央に位置する東西溝である。SA 1900 の北70cmの位置を平行し、一部途切れるものの発掘区の東から西へ貫通し、十四坪を南北におよそ2分する溝と考えられる。西方では溝幅30~50cm、東方のSA 1850の延長線より東では幅広くなり、溝幅約1mである。埋土からは平城宮土器IからIIの土器が出土した。

SD 2044 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北辺に位置する東西溝である。SD 2045の西から西方へ南に寄って流れる。SD 2082と重複は明確でなくSD 2045の延長とも考えられる。しかしこの溝はSB 2045より古く掘られており、存続時期は奈良時代の初期に限られると考えられるので、SD 2082・SD 2045に先行する溝と考えられる。

SD 2047 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の東辺北寄りに位置するL字形の溝である。北はSK 2001の南方から始まり、SD 1860から1.5m北の位置で東に曲がり、発掘区の東へ延びる。溝幅は南北方向の部分で2.4m、東西方向の部分で2.1mである。当初はSK 2001とつながり、SB 2015・SB 2002を囲んでいたと想定される。総柱建物SB 1890と重複し、柱穴との重複関係から、SD 2047はSB 1890より古く、SB 1890が建てられた時期にSD 2047が埋まり、北方が溜り状(SK 2001)になったと考えられる。

SD 2082・2045 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北辺に位置する東西溝。本来1本の溝と考えられ、東のSD 2045では東西11m、西のSD 2082では東西6.5mを検出した。位置的には十四坪の南北に北から4分する位置にあたり、十四坪を南北に区画する溝と考えられる。溝幅はSD 2082が1m、SD 2043が75cmである。

SE 1365 (PLAN 7; PL. 22) Q地区

十三坪地区の中央東南よりに位置する井戸。掘形はSB 1364の柱穴より前に掘られているが、井戸は建物(SB 1364)の内におさまり、柱穴の重複関係を工程の差と考えれば、SB 1364はSE 1365の井戸屋形となる。井戸枠内からは平城宮土器IVまたはVの土器が出土した。

SE 1700 (PLAN 3; PL. 24) O地区

十四坪北区の中央東南寄りに位置する井戸。掘形からは平城宮土器IまたはIIの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器IIIの土器が出土した。

SE 1867 (PLAN 2; PL. 24) O地区

十四坪北区の中央に位置し、SA 1850のすぐ西に位置する井戸。井戸の枠内から平城宮土器IからIIIの土器が出土した。

SE 1870 (PLAN 2・3; PL. 25) O地区

十四坪北区の中央西寄りに位置する井戸。まわりは大規模な土坑群に囲まれる。掘形が北のSE 1880と重複するが、重複関係からSE 1880より古い。井戸枠抜取穴からは平城宮土器IIまたはIIIの土器が出土した。

SE 1917 (PLAN 2; PL. 25) O地区

十四坪北区の中央西寄りに位置し、SE 1870・SE 1880の北にあたる。埋土からは平城宮土器

IIからIIIの土器が出土した。

SE 2019・2020 (PLAN 2; PL. 25) O地区

十四坪北区の北方中央に位置し、南と北を SB 2010・SB 2041、東を SA 2034 によって囲まれる。つくり替えがみられ、SB 2041 が SB 2042 に建て替えられたときに、井戸もつくり替えられたと考えられる。古い井戸が SE 2019、新しい井戸が SE 2020 である。SE 2020 の井戸枠内からは平城宮土器Vの土器が出土した。

SE 2070 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の東北に位置する。掘形からは平城宮土器 I と II の土器が出土し、井戸枠内からはIIIの土器が出土した。

* **SK 1322 (PLAN 7) Q地区**

十三坪地区の南辺東寄りに位置する東西 5.2m、南北 3.0m の不整形土坑である。SK 1322 は SB 1309 と重複し、SB 1309 より古い。

SK 1354 (PLAN 5・7) Q地区

十三坪地区の南東に位置する東西1.5m南北1.9mの不整形土坑である。埋土には炭化物が混じり、大量の土器が出土し、製塩土器も含まれていた。出土した土器の時期は平城宮土器IIまたはIIIである。SK 1354 は SB 1340 と重複し、SB 1340 より古い。

SK 1845 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央に位置する東西 70 cm、南北2.1mの楕円形土坑である。SK 1845 は十四坪を南北に2分する東西溝 SD 1860 と重複し、SD 1860 より古い。

* **SK 1886 (PLAN 3)**

十四坪北区の東辺中央に位置する南北 1.4m、東西 2.7m の平面台形の土坑である。埋土の重複関係から SK 1886 は SB 1890 より古い。埋土からは銅を含む鉄滓が出土した。

SK 1908 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央に位置する東西1.6m、南北1.5mの不整形土坑である。土坑の深さはもっとも深いところで 28 cm あり、底面は平坦で断面は梯形をなす (Fig. 19)。埋土はレンズ状に堆積しており、埋土からは多量の土器が出土し、平城宮土器 I と II の土器を含む。

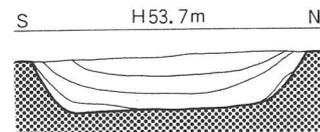


Fig. 19 SK 1908 断面図

SK 1971 (PLAN 6) P地区

* 十四坪南区の南辺西寄りに位置する東西 3.8m南北3.0mの大規模な土坑である。SB 1545 と重複し、SB 1545 より古い。埋土からは平城宮土器IIもしくはIIIの土器が出土した。また砥石に転用された埴が出土した。

SK 1980 (PLAN 4; PL. 15) P地区

* 十四坪南区の中央東寄りに位置する東西5.0m南北1.9mの隅丸方形土坑である。SB 1532 と重複し、SB 1532 より古い。深さは約 19 cm、埋土からは平城宮土器IIもしくはIIIの土器が出土した。

SK 2025 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北方中央に位置し、SE 2020 の西北に位置する土坑である。東西 3.4m、南北

1.7m の不整形で、東部(東西2.1m)が楕円状に一段深くなる。深さは東寄りの最深部で 27.5 cm である。埋土からは、韃羽口片13片、坩堝片26片、炉壁片 2片、不明土製品 3点、不明鉄片 2片、鉍滓11点等の鑄造に関する遺物が多数出土した。また砥石も 1点出土している。土器は平城宮土器Ⅱの土器が出土した。

SK 2026 (PLAN 2) O地区 *

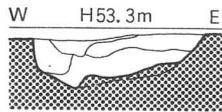


Fig. 20 SK 2026 断面図

十四坪北区の北辺西寄りに位置する、南北1.1m東西0.9mの円形土坑である。西寄り有一段深く(深さ 25 cm)、東はなだらかな斜面となる。埋土は焼土を含む黒色灰層と炭化物粒を含む暗灰粘土が層をなす。埋土からは、韃羽口片 16片、坩堝片、鉍滓 4点、不明土製品 2

点の鑄造関係遺物や平城宮土器Ⅱの土器が出土した。 *

SK 2078 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の西北に位置する不整形土坑。東西3.0m、南北2.5m、深さは 7 cm。SB 2080・SB 2081 と重複し、双方より古い。埋土には炭化物を含み、平城宮土器ⅡとⅢの土器が出土した。

SK 2084 (PLAN 2) O地区

SK 2078 の西北につながる不整形土坑である。東西2.5m、南北0.5m~1.0m、深さは 3 cm である。SB 2080・SB 2081 と重複し、双方より古い。 *

SX 1489 (PLAN 6 ; PL. 10) Q地区

十三坪地区北辺中央に位置する暗渠である。南北溝 SD 1412 が坪境小路南側構に流れ込む手前がある。暗渠の構造は平瓦 3枚を北の瓦が下になるように、数センチメートルずつ重ねて南北に並べている。この上部に溝の蓋をする施設があったと考えられるが、遺存していなかった。平瓦の寸法は、縦が 33 cm、横が 24 cm である (Fig. 21)。 *

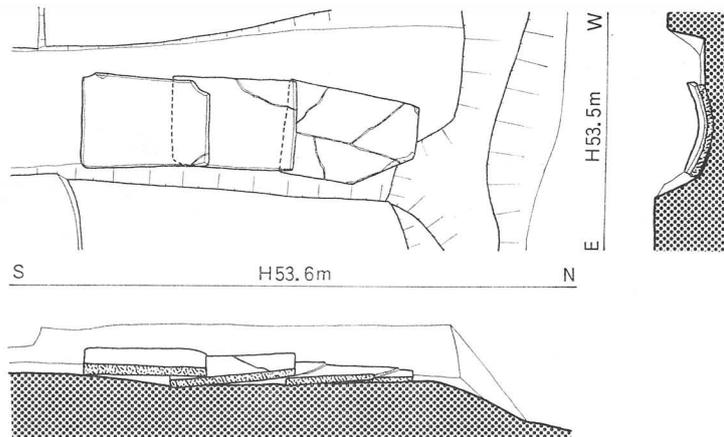


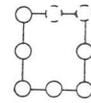
Fig. 21 SX 1489 断面図 (1:20)

B II期の遺構

II期では、I期に属する遺構のうち建物14棟、塀7条等が存続し、新たに構築されたおもな遺構として、建物24棟、塀6条、溝2条がある。また、2基の井戸がつくり替えられている。

SB 1313 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区南辺中央に位置する東西2間(2.4m)、南北2間(3.0m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は4尺等間である。柱穴は一辺50cm~70cmの方形である。SB 1313は、SB 1312と重複し、柱穴の重複関係からSB 1312より古い。



SB 1325 (PLAN 7; PL. 4) Q地区

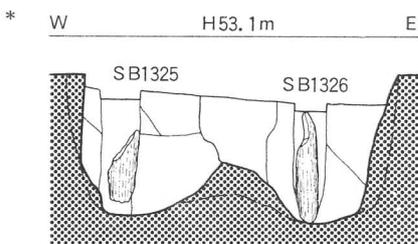
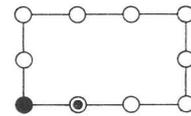


Fig. 22 SB 1325の柱根

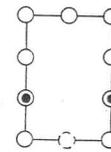
- * 十三坪地区の南方中央に位置し、SB 1327の東に棟をやや北にずらして建つ東西棟である。東西3間(6.3m)、南北2間(3.6m)である。桁行(東西)方向の柱間は7尺等間、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺60cm~80cmの方形で、深さは77cmである。西南隅柱穴に柱根を残し、柱根の直径は約15



cmである。柱穴の重複関係からSB 1325は、SB 1326より古い(Fig. 22)。

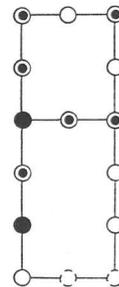
SB 1330 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の南方に位置する東西2間(3.3m)、南北3間(4.95m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向ともに、5.5尺等間である。柱穴は、形状・規模とも不揃いで、深さはおよそ60cmである。柱穴の重複関係から、SB 1330は、SB 1331より新しい。またSD 1345とも重複し、SB 1330はSD 1345より新しい。柱穴からは平城宮土器II~IIIの土器が出土した。



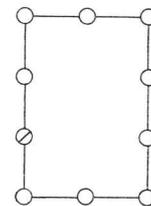
SB 1336 (PLAN 7; PL. 5) Q地区

- * 十三坪地区の東南隅に位置し、十三坪の西半をさらに2分する位置にある浅い溝(SD 1345)のすぐ西側に建つ東西2間(3.6m)、南北5間(10.5m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は7尺等間、梁間(東西)方向の柱間は6尺等間である。桁行方向の南から3間目の棟筋に柱穴があり、間仕切りのための柱と考えられる。柱穴は一辺60cmの方形で、深さは60cmである。柱穴からは平城宮土器IIもしくはIIIの土器が出土した。



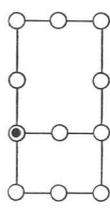
SB 1340 (PLAN 5) Q地区

- * 十三坪地区の東南に位置し、十三坪を東西に2分した西半の区画の東を限る塀(SA 1355)のすぐ西に建つ東西2間(4.8m)、南北3間(7.2m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向・梁間(東西)方向ともに8尺等間である。平面は平行四辺形をなし、国土方眼方位に対し桁行方向で東に2°15'、梁間方向で南に5°03'振れる。柱穴は不揃いで一辺50cm~1mの不整形である。柱穴の重複関



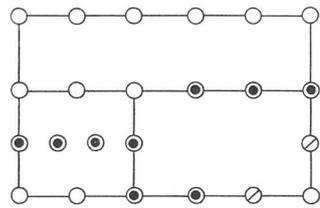
係から SB 1340は、SB 1324 より新しい。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SB 1350 (PLAN 7; PL. 5) Q地区



十三坪地区の中央南寄りに位置し、SB 1336 の北側に棟筋を揃えて建つ東西 2 間 (3.3m)、南北 3 間 (6.9m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は中央がやや狭く 7 尺、両脇間が 8 尺である。梁間 (東西) 方向の柱間は 5.5 尺等間である。桁行方向に南 1 間・北 2 間に仕切られる。柱穴は一辺約 50cm の不整形である。西側柱の南から 2 番目の位置に柱痕跡をとどめている。柱穴からは平城宮土器ⅡもしくはⅢの土器が出土した。

SB 1380 (PLAN 7; PL. 6) Q地区



十三坪地区の中央に位置する。東西 5 間 (11.4m)、南北 3 間 (7.2m) の北庇付きの東西棟である。桁行方向 (東西) の柱間は東から 7.5 尺・7.5 尺・8 尺・7.5 尺・7.5 尺で、梁間方向では身舎の柱間が 7 尺等間、北庇の出が 10 尺である。十三坪地区では最も立派な建物であり、この

区画の中心をなす建物と思われる。身舎を東 3 間と西 2 間に間仕切り、西の部屋内には床束の跡があり、床を張っていたものと思われる。柱穴は一辺 60cm~1m の方形で、柱痕跡の直径は約 20cm である。柱穴の重複関係から SB 1381 より新

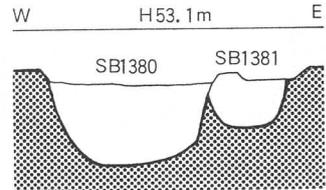
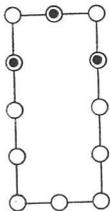


Fig. 23 SB 1380・1381 の重複

しく、SB 1381 の中心を踏襲し、規模を拡大し建て替えたと考えられる。また SB 1402 とも重複し、柱穴の重複関係から SB 1402 より古い (Fig. 23)。柱穴からは平城宮土器ⅡからⅢの土器が出土した。

SB 1395 (PLAN 5; PL. 7) Q地区



十三坪地区の中央東寄りに位置し、十三坪を東西に 2 分する道路 (SF 1320) の西側に建つ塀 (SA 1430) と重複する。東西 2 間 (3.3m)、南北 4 間 (7.5m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は不揃いで総長が 25 尺、梁間 (東西) 方向の柱間は 5.5 尺等間であ

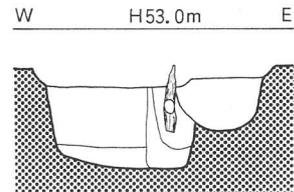
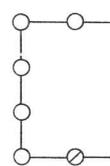


Fig. 24 SB 1395 の柱根

る。柱穴は一辺約 70cm の方形もしくは不整形である。柱穴の重複関係から SA 1430 より古く、SB 1395 は十三坪を東西に 2 分する道路 SF 1320 がつくられる以前の建物と考えられる (Fig. 24)。北妻柱、西側柱北から 2 番目、東側柱北から 2 番目に柱痕跡をとどめる。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SB 1403 (PLAN 7) Q地区

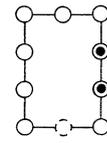


十三坪地区の南西に位置し、SB 1336・SB 1350 と棟筋を揃えて建つ。東西 2 間 (4.2m)、南北 3 間 (5.4m) の南北棟で、桁行 (南北) 方向の柱間は 6 尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は 7 尺等間である。柱穴は全体的に小ぶり (40cm~50cm) である。柱穴の重複関係から SB 1403 は SB 1404 より新しい。規模・形式とも SB 1404 とよく似ており SB 1404 を建て替えたものと考えられる。柱穴からは平城宮土器ⅡとⅢの土器が出土した。

SB 1423 (PLAN 7) Q地区

SB 1403の北側に棟筋を揃えて建つ。東西2間(3.0m)、南北3間(4.5m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向ともに5尺等間である。柱穴は一辺約50cmである。柱穴の重複関係からSB 1423はSB 1473より新しい。また

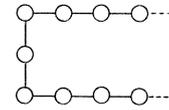
- * SB 1423の柱穴は平城宮土器Ⅲの土器を含む土坑SK 1398より新しい。東側柱南から2番目及び3番目の位置に柱痕跡をとどめる。



SB 1472 (PLAN 4; PL. 10) Q地区

十三坪地区の東北隅に位置し、SB 1471の東に建つ。東西3間(4.5m)以上、南北2間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は5尺等間、

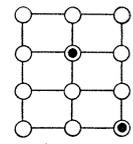
- * 梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴の重複関係からSB 1472は、SA 1473より新しい。



SB 1477 (PLAN 6; PL. 11) Q地区

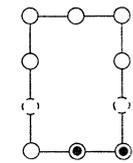
十三坪地区の北辺中央に位置する東西3間(4.5m)、南北2間(3.9m)の東西棟の総柱建物である。桁行(東西)方向の柱間は5尺等間、梁間(南北)方向

- * の柱間は6.5尺等間である。柱穴は他の総柱建物と同様に大ぶりで、一辺80cm~1mの不整形である。SB 1476とSB 1478との柱穴の重複関係からSB 1477は、SB 1476より新しく、SB 1478より古いことがわかる。東南隅柱位置及び棟通りの北から2番目の位置に柱痕跡をとどめる。



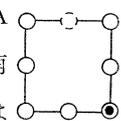
SB 1539 (PLAN 6) P地区

- * 十四坪南区の南辺中央に位置する東西2間(3.6m)、南北3間(5.4m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向とも6尺等間である。柱穴は一辺40cm程度の小規模な不整形である。SB 1543と重複して建つが、SB 1543との柱穴の重複はない。東南隅柱位置及び南妻柱位置に柱痕跡をとどめている。



SB 1546 (PLAN 6) P地区

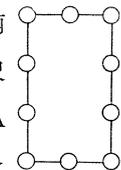
- * 十四坪南区の南辺西寄りに位置し、十四坪の西半をさらに二分する南北塀(SA 1548)の東に建つ。東西2間(3.3m)、南北2間(3.6m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いで、およそ一辺40cm~80cmである。柱穴の重複関係からSB 1546はSB 1545より古い。また南妻柱は、SA 1548に先行し十四坪をほぼ東西に4分する南北溝(SD 1547)の埋土の底で検出された。



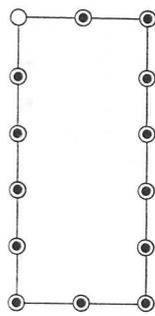
SB 1562 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の中央東寄りに位置する東西2間(3.6m)、南北3間(5.85m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は、規模・形状とも不揃いである。SF 1970の東に建ち、SA

- * 1558と重複する。柱穴の重複関係から、SB 1562はSA 1558より古く、SB 1562は十四坪に南北道路(SF 1970)が通る以前の建物と考えられる。また、SE 1560・SB 1561と重複し、柱穴の重複関係から、SB 1562は双方より古い。

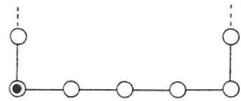


SB 1577 (PLAN 6) P地区



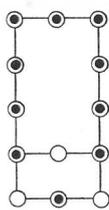
十四坪南区の中央西寄りに位置する東西2間(5.1m)、南北5間(10.4m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は、南4間が7.5尺等間、北1間が8尺、梁間(東西)方向の柱間は8.5尺等間である。各柱間寸法が大きく、調査区内の建物のなかでは規模が大きな建物である。柱穴は一辺70cm前後の方形で、柱痕跡は直径約15cmである。柱穴の重複関係からSB 1577は、SB 1576より古いことがわかる。

SB 1581 (PLAN 6) P地区



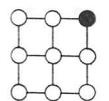
十四坪南区の北辺中央に位置し、SB 1580と同様にSA 1571をまたいで建つ。東西棟の南側柱列と梁間1間分を検出した。東西4間(8.4m)、南北1間(2.1m)以上の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は7尺等間、梁間(南北)方向の柱間は7尺である。柱穴は60cm×110cmの東西に長い長方形である。柱穴の重複関係からSB 1581は、SB 1582より新しい。

SB 1587 (PLAN 6; PL. 13) P地区



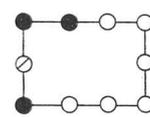
十四坪南区の西辺に位置し、十四坪の西半をさらに東西に2分する塀SA 1548の西に建つ。東西2間(3.3m)、南北4間(7.2m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は5.5尺等間である。桁行方向に南1間と北3間に間仕切る。柱穴は一辺50cm前後の不整形である。柱穴の重複関係からSB 1587は、SB 1549より古くSB 1588より新しい。柱穴からは平城宮土器IIとIII以降の土器が出土した。

SB 1810 (PLAN 3; PL. 18) O地区



十四坪北区の中央に位置し、SB 1781と北妻を合わせて重複する。東西2間(2.7m)、南北2間(3.0m)の南北棟の総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は5尺等間、梁間(東西)方向の柱間は4.5尺等間である。柱穴は直径約60cmの円形である。東北隅柱掘形に柱根を残す。柱穴の重複関係からSB 1810は、SB 1781より古いことがわかる。

SB 1830 (PLAN 3; PL. 18) O地区



十四坪北区の中央東寄りに位置する東西3間(5.1m)、南北2間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から6尺・5尺・6尺、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺約60cmの不整形で、西北隅と西南隅の掘形に柱根が残る。西北隅柱は直径18cm、西南隅柱(Fig. 25)は直径10cmである。柱穴の重複関係からSB 1830は、SB 1820より新しい。またSB 1830は平城宮土器IIの土器を含む土坑(SK 1832)より新しい。柱穴からは平城宮土器IIIの土器が出土した。

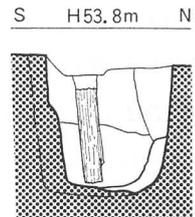


Fig. 25 SB 1830の柱根

SB 1890 (PLAN 2・3; PL. 19) O地区

十四坪北区の中央北東寄りに位置する東西2間(4.5m)、南北3間(5.7m)の南北棟の総柱

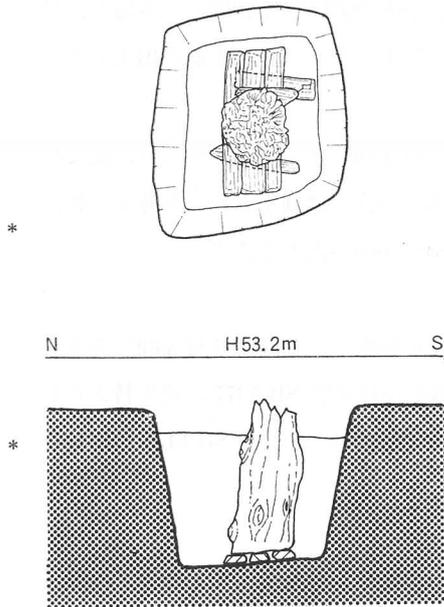


Fig. 26 SB 1890 の柱根と礎盤

SB 2010 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の中央北寄りに位置する東西3間(5.4m)、南北2間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は6尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱掘形は一辺50cm~60cmの不整形、柱痕跡は直径15cm~20cmである。柱穴の重複関係からSB 2011より新しく、SB 2011を建て替えたものと考えられる。またSB 2010は重複関係から平城宮土器II・IIIの土器を含む土坑(SK 2007)より新しい。

SB 2040 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北辺に位置する東西4間(8.7m)、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から7尺・7尺・7.5尺・7.5尺、梁間(南北)の柱間は6尺等間である。柱掘形は一辺50cmの方形で、柱痕跡は直径15cmから20cmである。柱穴の重複関係からSB 2040は、SB 2035より古く、SB 2041より新しい。この建物はSB 2041を東南にずらして建て替えたものと考えられる。

SB 2065 (PLAN 2) O地区

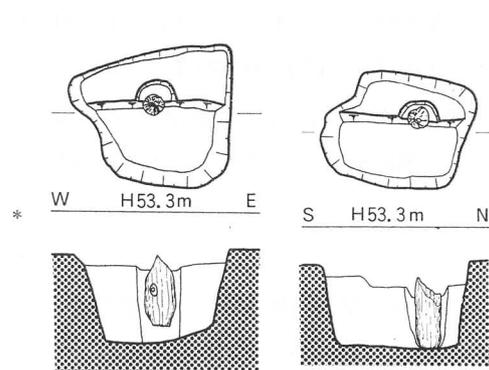
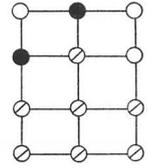
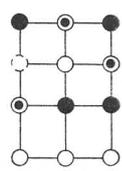


Fig. 27 SB 2065 の柱根

建物である。桁行(南北)方向の柱間は中央間が7尺、脇間が6尺、梁間(東西)方向の柱間は7.5尺等間である。柱穴は南北130cm東西70cmの隅丸長方形で、2箇所に残る。1箇所は北妻中央柱で柱直径が35cmである。もう1箇所は西側柱、南から3つ目で柱直径33cm、底に木製礎盤を敷く(Fig. 26)。また建物内の柱穴には木製礎盤と根石が残る。柱掘形からは平城宮土器I~II、柱抜取穴からは平城宮土器IIIの土器が出土した。



十四坪北区の西北に位置する東西2間(3.6m)、南北3間(5.85m)の南北棟総柱建物である。桁行(南北)方向の柱間は南から7.5尺・6尺・6尺、梁間(東西)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺70cm~80cmの方形または不整形である。柱根は4箇所に残っており、柱直径は15cm~20cmと不揃いである(Fig. 27右; 西北隅・左;



東側南から2番目)。また平城宮土器Ⅱの土器を含む土坑(SK 2061・SK 2062)と重複し、柱穴は土坑の埋土の底面で検出された。柱穴からは平城宮土器ⅠもしくはⅡの土器が出土した。

SA 1421 (PLAN 7) Q地区

十三地区の西辺北寄りに位置する南北塀である。まわりの建物群とは方位が異なり、北でやや西に振れる。7箇所の柱穴を検出したが、あいだの2箇所の柱穴は削平されたと考えられ、*
本来は8間であったと推定される。柱穴は小さく直径20cm～30cmの円形である。

SA 1433 (PLAN 6) Q地区

十三坪地区の北辺中央に位置する南北塀である。3間分を検出し、柱間は6尺等間である。柱筋がSA 1432の東から3箇所目の柱穴に揃い、SB 1476が総柱建物SB 1477に建て替えられたときに、建物を囲むようにSA 1432にとりつけられたものと考えられる。SB 1475・SB 1478 *
と重複し、双方より古い。

SA 1850 (PLAN 2・3; PL. 19) O地区

十四坪北区の中央に位置するL字型の南北塀である。十四坪の北半を東から4分する位置よりやや西に建つ。南はSA 1900の北3.5mの位置から始まり、北へ7間分を検出した。北端は、1間分西に折れ、SB 2010と柱筋が揃い、SB 2010に取りついていたとも考えられる。したがって、SA 1850・SB 2010ともに、SK 2006・SE 1867をとり囲んでいたと考えられる。柱間は5尺～7尺と不揃いで、柱穴も一辺40cm～50cmで、形状は不揃いである。

SA 1927 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北寄りに位置する南北塀である。総柱建物SB 2065の東約2.6mの位置にあり、柱間数は4間、柱間は6尺等間である。北端で西に1間分(5尺)折れる。SB 2065の目 *
隠し堀的な性格と考えられる。柱穴は一辺50cmの方形もしくは楕円形である。

SA 2012 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北方中央に位置する東西塀である。SA 2009の北(1.5m)の位置に平行して建つ。5間分を検出し、柱間は西から7尺・7尺・9尺・8尺・8尺である。柱穴は直径30cm前後の小規模な円形である。 *

SA 2014 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北方に位置する南北塀である。SE 2020とSA 2009・SB 2011の間に位置し、3間分を検出した。柱穴は一辺約30cmの不整形である。

SA 2042 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北方西寄りに位置する南北塀である。SA 2014の延長上にあたり、南はSE *
2012の北から始まり、北はSB 2041の妻柱筋で終わる。柱間数は4間、柱間は7尺等間である。柱穴は一辺40cmの方形もしくは円形で、一部に柱痕跡を残す。柱穴の重複関係から、SB 2042はSB 2080より新しい。SB 2041・SA 2034とともにSE 2020とそのまわりの土坑群をとり囲んでおり、これらは一連の遺構と考えられる。

SE 1880 (PLAN 3; PL. 25) O地区

十四坪北区の中央西寄りに位置する井戸。まわりを大規模な土坑群に囲まれる。掘形が南のSE 1870と重複するが、重複関係からSE 1880は、SE 1870より新しい。掘形から平城宮土器Ⅰ～Ⅲの土器が出土している。

SK 1348 (PLAN 5) Q地区

十三坪東辺南寄りに位置し、十三坪を東西に2分する道路(SF 1320)上にある東西1.5m、南北1.9mの隅丸長方形土坑である。中央部が幅1mにわたり一段(15cm)深く、遺構

- * 面からの深さは、75cmである。底には植物質の炭化物層(厚さ2~4cm)を含む灰色粘土が詰まり、その上層の埋土には焼土・炭化物を含む(Fig. 28)。埋土からは平城宮土器Ⅲの土器が多量に出土した。

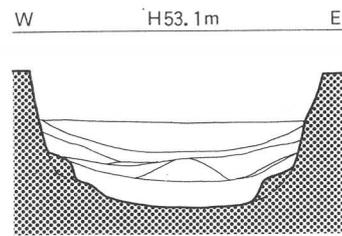


Fig. 28 SK 1348 断面図

SK 1377 (PLAN 5) Q地区

- * 十三坪地区の中央東寄りに位置する東西1.9m、南北4.0mの不整形土坑である。埋土はSE 1375およびSD 1407に破壊されている。埋土からは、製塩土器及び平城宮土器Ⅲに属する土器が出土した。

SK 1763 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央東寄り、井戸SE 2700の東に近接して存在する東西1.0m、南北3.35mの南北に細長い土坑である。埋土には炭化物を含み、鋳造関係遺物である埴塼片8片が出土した。

SK 1773 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の南方中央に位置する平面台形状の土坑である。東西2.7m、南北2.7m、深さは30cmである。埋土からは平城宮土器ⅡもしくはⅢの土器が出土した。

- * **SK 1809 (PLAN 3) O地区**

十四坪北区の中央西寄りに位置する東西1.7m、南北3.9mの南北に長い土坑である。埋土からは多量の土器が出土し、平城宮土器Ⅱの土器が確認された。

SK 1825 (PLAN 3; PL. 19) O地区

十四坪北区の中央に位置する南北2.0m、東西1.35mの平面縦長台形の土坑である。SB 1810の南に位置し、SB 1780と重複し、SB 1780より新しい。埋土には炭化物を含んでいる。埋土からは、鞆羽口片2片、埴塼片15片の鋳造関係遺物や、平城宮土器ⅠもしくはⅡの土器が出土した。土坑の深さは、最も深いところで約65cmである(Fig. 29)。

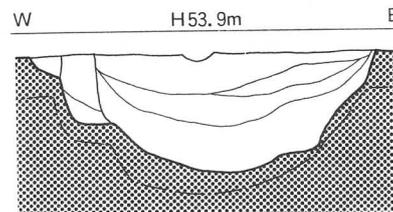


Fig. 29 SK 1825 断面図

SK 1832 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央に位置する東西2.8m、南北1.7mの不整形土坑である。SB 1380と重複し、SB 1380より古い。埋土には大量の炭化物を含み、鞆羽口片2片、鋳滓8点の鋳造関係遺物が出土し、また平城宮土器Ⅱの土器が出土した。

- * **SK 1942 (PLAN 3) O地区**

十四坪北区の東北寄りに位置する東西5.4m、南北2.5mの大規模な土坑である。SB 1380・SA 1900と重複し、双方より古い。埋土には大量の炭化物を含み、鞆羽口片8片、埴塼片9片、鋳滓2点の鋳造関係遺物が出土し、また平城宮土器Ⅱに属する土器が出土した。

SK 1943 (PLAN 3 ; PL. 18) O地区

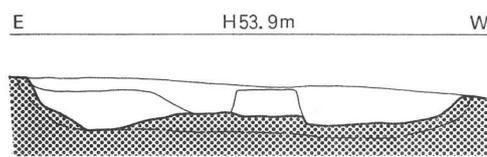


Fig. 30 SK 1943 断面図

十四坪北区の中央にある不整形土坑。東西1.9m, 南北2.8m, 深さは最深部で28cmである。埋土はおもに上層が炭化物を大量に含む黒褐色土, 下層が黒斑黄色土である (Fig. 30)。出土した土器は, 平城宮土器Ⅲに属する。*

SK 1982 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の中央に位置する東西2.3m, 南北1.2mの不整形土坑である。SB 1559・SB 1561と重複し, SB 1559より新しく, SB 1561より古い。深さは約8cmである。埋土からは平城宮土器ⅠもしくはⅡの土器が出土した。

SK 1985 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の東辺に位置する東西2.9m, 南北3.1mの大規模な土坑である。深さは約9cm。埋土には大量の炭化物を含む。また大量の土器が出土し, 平城宮土器Ⅲの土器が確認された。

SK 2001 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の東北に位置する大規模土坑である。Ⅰ期の東西溝SD 2047の北半分に位置し, 当初はSD 2047と一連のL字形の溝であったと考えられる。東のSB 2002・SB 2015までは約1mで, L字形に2棟の建物を囲む。SB 1890(Ⅱ期)が建てられる時に, 溝が分断されて土坑状になったと思われる。東西2.7m, 南北14.3m, 深さは23cmである。埋土から平城宮土器Ⅲの土器が出土しており, 最終的な埋没はⅡ期にくだる。埴埴片2片, 砥石片3片, 鋳滓5点, 不明鉄片1片, 不明土製品1点, 羽口片3片の鋳造関係遺物や漆紙文書が出土した (Fig. 31)。

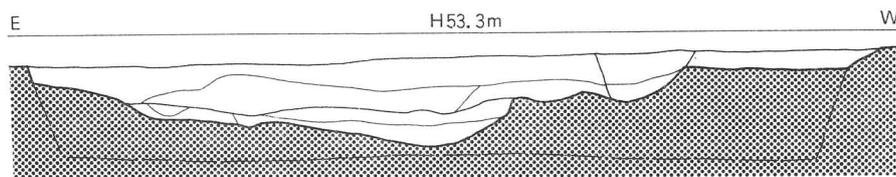


Fig. 31 SK 2001 断面図

SK 2006 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の中央北寄りに位置し, SB 2010とSB 1850に挟まれる東西2.7m, 南北4.5mの不整形土坑で, 深さは中央で約110cmである。

埋土からは, 鞆羽口片1片, 埴埴片17片, 鋳滓7点, 砥石3点の鋳造関係遺物が出土した。また4.5cm大のスサ入りの粘土片が出土した。粘土片には一部に焼け面が残っており, 鋳造炉の壁面の可能性が考えられる。また平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土した。*

SK 2016 (PLAN 2)

十四坪北区の中央北寄りに位置する東西3.0m, 南北6.0mの不整形土坑である。深さは10cmであるが, 西側が一段(南北3.0m, 東西2.0m)深く, 深さ30cmである。埋土から鋳滓が出土し, 埋土には多量の炭化物を含む。

SK 2051 (PLAN 2)

十四坪北区の中央に位置する南北90cm, 東西80cmの円形土坑である。SK 2006の埋土を

掘り込んでいる。埋土から、内面にカラミの付着した完形品の埴塼が出土した。

SK 2073 (PLAN 2) O地区

十四坪北区に位置する南北 3.0m, 東西 1.5m, 深さ 28 cm の不整形土坑。埋土は炭化物の混じる暗灰色粘質土ないし灰色砂質土。平城宮土器Ⅱの土器とともに統一新羅陶器が出土した。

SK 2084 (PLAN 2) O地区

十四坪北区に位置する南北 0.9 m, 東西 2.5 m, 深さ 5 cm の不整形土坑。埋土は炭化物を含む暗灰褐砂質土。統一新羅陶器が出土した。

C III期の遺構

* III期には、坪境道路が拡幅され、十三坪・十四坪とも敷地が細分される。II期に属する遺構は3基の井戸を残してすべて建て替えられる。III期に属するおもな遺構は建物26棟、塀22条、溝6条、井戸12基である。

SF 1320 (PLAN 5 ; PL. 7・12) Q地区

十三坪地区の東に位置し、十三坪を東西に2分する南北道路である。SD 1318・SD 1386が東側構、SD 1319・SD 1387が西側構である。両側構の心中心距離は3.0m (10尺)、路面幅は2.6mである。

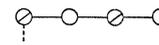
SF 1970 (PLAN 4 ; PL. 17) O・P地区

十四坪南区から十四坪北区にのびる南北道路である。十四坪を東西にほぼ2分する位置にあるが、中心線は十三坪を東西に2分する南北道路SF 1320とは揃わずに、西へずれる。東側構はSD 1563・SD 1698、西側構はSD 1568である。道路幅は北へ行くほど細くなり、両側構の間隔(心中心距離)は、南の坪境道路(SF 2000)付近で2.1m (7尺)、SA 1646・SA 1647の北端位置で1.5m (5尺)である。溝幅は南方で広がっているものの、当初は40cm程度と考えられるので、路面幅は南で1.7m, 北で1.1mである。

なお、道路に伴う東西側構、及び東西の敷地を区画する南北塀が、十四坪北区の発掘区南端から13.5mの位置で終わっており、道路もこの位置で行き止まりとなり、SF 1970が十四坪を南北に貫通していたとは考え難い。

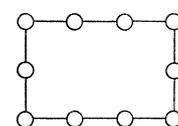
SB 1308 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の南辺に位置する桁行3間の東西棟で、その北側柱列を検出した。東西5.4m (6尺等間)、南北長は不明である。柱穴は、約50cmの方形である。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土し、また東北隅柱は平城宮土器ⅡまたはⅢの土器を含む土坑(SK 1306)の埋土を掘って建てられている。

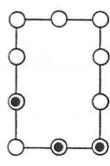


SB 1328 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区南辺に位置する東西3間(5.85m)、南北2間(3.9m)の東西棟である。柱間は桁行(東西)方向、梁間(南北)方向ともに、6.5尺等間である。柱穴は、形状・規模とも不揃いである。なお北側の柱穴1個は後世の土坑のため削平され検出できなかった。柱穴からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。

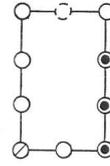


SB 1343 (PLAN 7) Q地区



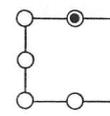
十三坪地区の南方中央に位置する東西2間(3.3m)、南北3間(5.1m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は南から6尺・6尺・5尺、梁間(東西)方向は5.5尺等間である。柱穴は、規模・形状ともまちまちで、一辺がおよそ60cm~90cmである。柱穴からは平城宮土器IVもしくはVの土器が出土した。*

SB 1344 (PLAN 7) Q地区



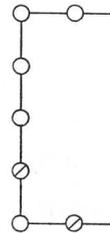
SB 1343の西側に平行して建つ東西2間(3.3m)、南北3間(5.55m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は、北の1間がやや広く6.5尺で南の2間が6尺である。梁間(東西)の柱間は5.5尺の等間である。柱穴は形・大きさとも不揃いで一辺40cmから70cmである。柱穴の重複関係からSB 1344・SB 1330より新しい。*

SB 1363 (PLAN 7; PL, 4) Q地区



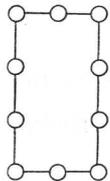
十三坪地区の中央南寄りに位置する東西3間(5.85m)、南北2間(3.3m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は6.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺70cmの方形である。柱穴の重複関係から、SB 1363はSB 1364より古い。*

SB 1402 (PLAN 7) Q地区



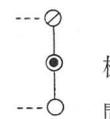
十三坪地区の中央に位置する東西2間(4.2m)、南北4間(8.4m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向ともに7尺等間である。柱穴は形状・規模とも不揃いである。柱穴の重複関係からSB 1402はSB 1380・SB 1405より新しい。柱穴からは平城宮土器IVからV期の土器が出土した。*

SB 1415 (PLAN 6・7) Q地区

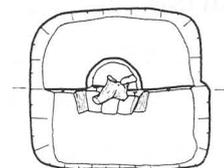


十三坪地区の中央北寄りに位置する東西2間(3.3m)、南北3間(6.3m)の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は7尺等間、梁間(東西)方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いで、とくに妻柱は小さい。柱穴の重複関係からSB 1415は、SB 1391より古い。*

SB 1420 (PLAN 7) Q地区



十三坪地区の中央西辺に位置する南北2間(3.6m)の東西棟の東妻柱筋を検出した。柱間は、梁間(南北)方向が6尺等間で、桁行(東西)方向は不明である。柱穴は一辺約50cmの方形である。*



W H54.8m E

SB 1470 (PLAN 4; PL. 10) Q地区

十三坪地区の東北隅に位置し、十三坪を東西に2分する道路(SF 1320)の東側の宅地に建つ。東西3間(9m)、南北2間(5.4m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は10尺等間、梁間(南北)方向の柱間は9尺等間である。今回の調査で10尺以上の柱間をもつ建物はSB

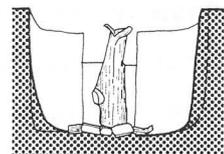
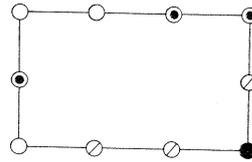


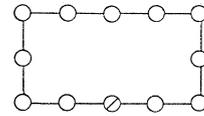
Fig. 32 SB 1470の柱根

1470のみである。柱掘形は1.0m×70cmの東西に長い長方形で、東南隅の柱掘形に柱根が残る。直径は約15cmである (Fig. 32)。柱穴の重複関係からSB 1470はSB 1471より新しい。柱穴からは平城宮土器ⅢとⅤの土器が出土した。



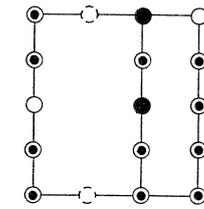
* **SB 1475** (PLAN 4・6) Q地区

十三坪地区の北辺中央に位置する東西4間(6.9m)、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から6尺・5.5尺・5.5尺・6尺、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺80cmで方形または不整形である。柱穴の重複からSB 1476より古い。



* **SB 1534** (PLAN 4; PL. 14) P地区

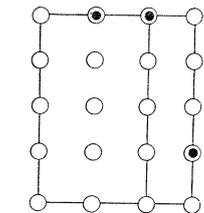
十四坪南区中央東寄りに位置する。東西3間(6.45m)南北4間(7.2m)の東庇付きの南北棟である。身舎の桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は7尺等間、庇の出は7.5尺である。柱穴は一辺80cmの方形で、2箇所柱根を残す。1箇所は身舎東北隅柱で、直径



15cm, 柱の下に石を敷き礎盤としている。もう1箇所は東側柱列の中央柱で直径は18cmである。柱穴からは平城宮土器Ⅰ～Ⅴの土器が出土した。東庇からは胞衣壺(SX 1535)が出土した, 胞衣壺は身舎柱の柱掘形を掘って埋められており, 平城宮土器Ⅲの土器にあたる。

SB 1545 (PLAN 6) P地区

* 十四坪南区の南辺西寄りに位置し, SB 1543の西に建つ東西3間(6.0m)、南北4間(7.5m)の東庇付南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は南から7尺・6尺・6尺・6尺、梁間(東西)方向では身舎柱間が7尺等間、東庇の出が6尺である。身舎棟筋に柱穴を検出したが、側柱筋と柱筋は揃わない。棟筋の柱穴は床束の跡で、床張建物であったと考えられる。柱穴

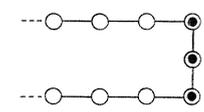


* は50cm～80cmの方形で、一部に柱痕跡を残す。柱穴の重複関係からSB 1545は、SB 1547より古く、SB 1546より新しい。

SB 1549 (PLAN 6) P地区

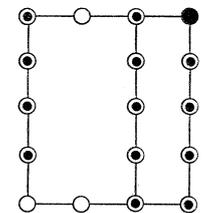
十四坪南区の西辺に位置する東西3間(4.8m)以上、南北2間(3.0m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は6尺等間、梁間(南北)方向

* の柱間は5尺等間である。柱穴は一辺50cm～80cmの不整形である。柱穴の重複関係からSB 1549は、SB 1587より新しい。柱穴からは平城宮土器ⅠまたはⅡの土器とⅣまたはⅤの土器が出土した。



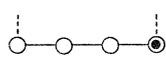
SB 1554 (PLAN 4; PL. 14) P地区

十四坪南区の北東に位置し、十四坪を南から南北に8分する塀(SA 1551)をはさみ、SB 1534の北にやや棟筋を違えて建つ。1/32町に宅地が割られた時の宅地の中心建物である。東西3間(6.3m)、南北4間(7.5m)の東庇付きの南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は南より6.5尺・6.5尺・6尺・6尺、梁間(東西)方向の柱間は7尺等間、庇の出は7尺であ



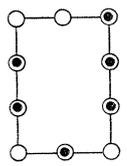
る。桁行寸法が若干異なるもののSB 1534とよく似ており、同時期の同じ構造をもった建物と思われる。柱穴は一辺80cmの方形で、庇東北隅柱に柱根を残す。柱根の直径は12cmである。他の柱穴に残る柱痕跡は15cm前後である。柱穴の重複関係からSB 1554は、SB 1553より新しい。

SB 1557 (PLAN 4; PL〇〇) P地区 *



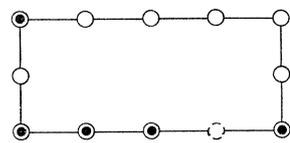
十四坪南区の北辺に位置する柱列である。桁行3間の東西棟の南側柱列または南庇柱列、もしくは片面庇付南北棟の南妻柱列と考えられる。東西3間(5.4m)で柱間は6尺等間である。柱穴はおよそ一辺50cmの方形で、東南隅柱に柱痕跡を残す。

SB 1561 (PLAN 4; PL. 13) P地区 *



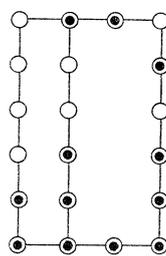
十四坪南区の中央東寄りに位置し、十四坪の西半の東を限る塀SA 1558の西に建つ東西2間(3.6m)、南北3間(5.4m)の南北棟である。柱間は桁行(南北)方向、梁間(東西)方向とも6尺等間である。柱穴は一辺約80cmの方形であるが、南妻柱列の3個の柱穴は一回り小さく一辺約50cmの方形である。土坑(SK 1982)を伸介とした重複関係からSB 1561は、SB 1562より新しく、SB 1562を建て替えたものと思われる。柱穴からは平城宮土器IVもしくはVの土器が出土した。

SB 1575 (PLAN 6) P地区



十四坪南区の中央西寄りに位置し、SB 1548の東に建つ。東西4間(10.2m)南北2間(4.5m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は8.5尺等間、梁間(南北)方向の柱間は7.5尺等間である。8.5尺の柱間は、今回検出した建物のなかでは大規模である。柱穴は一辺50cm~1mの方形で、東妻中央の柱穴に柱根を残す。柱根は、直径約20cmである。柱穴の重複関係からSB 1575はSB 1576より新しい。柱穴からは平城宮土器IV~Vの土器が出土した。

SB 1585 (PLAN 6; PL. 13) P地区 *



十四坪南区の西辺に位置し、SA 1548の西側に建つ。東西3間(5.55m)南北5間(9.0m)の西に縁もしくは土庇をもつ南北棟である。柱間は身舎桁行(南北)方向、梁間(東西)方向とも6尺等間で、西1間の出は6.5尺である。西1間分は身舎からの出が少なく、柱穴も小さく、縁もしくは土庇と考えられる。身舎の柱穴は一辺約60cmの方形で、西1列の柱筋の柱穴は約30cmの方形で、身舎の柱掘形より一回り小さい。柱穴の重複関係から、SB 1585は、SB 1588より新しく、SB 1591より古い。柱穴からは平城宮土器IIもしくはIIIの土器が出土した。

SB 1605 (PLAN 3) O地区

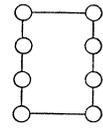


十四坪北区の東南隅に位置する東西2間(2.4m)、南北1間(1.5m)以上の南北棟である。桁行(南北)1間以上(5尺等間)、梁間(東西)2間(4尺等間)の南北棟の北1間分を検出したと考えられる。柱穴は一長径60cmの楕円形である。柱穴からは平城宮土器IIIの土器が出土した。

SB 1608 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の東南隅に位置し、SB 1605 の北側に棟筋を揃えて建つ。SB 1605 との間隔は1.65m (5.5尺) である。東西1間 (2.7m)、南北3間 (4.05m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は4.5尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は9尺である。

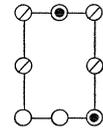
- * 妻柱筋は精査したが妻中央柱がなく、梁間1間の建物もしくは妻中央柱の柱穴が削平されたと考えられる。柱穴は一辺40cm前後の方形である。



SB 1720 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の南方西寄りに位置する東西2間 (2.7m)、南北2間 (4.2m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は7尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は4.5尺

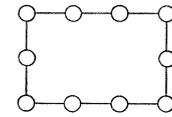
- * 等間である。柱穴は一辺50cm前後の方形である。柱穴の重複関係から SB 1720 は、SB 1743 より新しい。



SB 1760 (PLAN 3; PL. 17) O地区

十四坪北区の南東寄りに位置し、SB 1710 の東に SB 1710 と北柱筋を揃えて建つ東西3間 (5.4m)、南北2間 (3.6m) の東西棟である。柱間は桁行

- * (東西) 方向、梁間 (南北) 方向とも6尺等間である。柱穴は一辺50cm~60cmの方形または楕円形である。柱穴の重複関係から SB 1760 は、SB 1690・SB 1691 より古い。

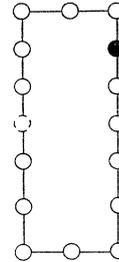


SB 1781 (PLAN 3; PL. 18) O地区

十四坪北区の中央に位置し、北妻が十四坪を南北に2分する塀と近接する。東西2間 (3.6m)、南北6間 (9.6m) の南北棟である。桁行 (南北) 方向の柱間は南2間が6尺等間、北4間が5尺等間、梁間 (東西) 方向の柱間は6尺等間である。柱穴は比較的小さく一辺40cm前後の方形である。柱穴の重複関係から SB 1781 は、SB 1780・SB 1810 より新しい。柱穴からは平城宮土器 II~III の土器が出土した。

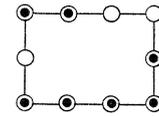
- * **SB 1937 (PLAN 3) O地区**

十四坪北区の西南隅に位置し、十四坪を東西に2分する道路の西塀 (SA 1647) の西90cmに位置する。梁間 (南北) 2間 (5.5尺等間) の東西棟の東妻柱列を検出した。柱穴は、一辺40cmの楕円形である。



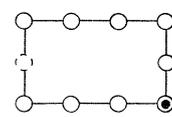
SB 2030 (PLAN 2) O地区

- * 十四坪北区の東北に位置する東西3間 (4.95m)、南北2間 (3.6m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は5.5尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は6尺等間である。柱穴は一辺50cmの方形、柱痕跡は直径18cmである。柱穴からは平城宮土器Vの土器が出土した。



SB 2035 (PLAN 2) O地区

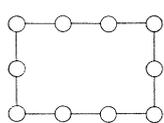
- * 十四坪北区の北辺に位置し、SA 2034 と東妻柱が重複する東西3間 (5.4m)、南北2間 (3.3m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は6尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は5.5尺等間である。柱穴は一辺40cm~50cm



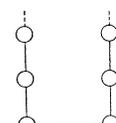
の方形で、柱痕跡は直径27cmである。柱穴の重複関係から SB 2035 は、SB 2040・SB 2041 よ

り新しい。柱穴からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SB 2080 (PLAN 2) O地区

 十四坪北区の北辺西寄りに位置する東西3間(5.4m)、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向、梁間(南北)方向とも柱間は6尺等間である。柱掘形は一辺60cm~70cmの隅丸方形である。柱穴の重複関係からSB 2080は、SB 2081・SB 2042より古い。

SB 2083 (PLAN 2) O地区

 十四坪北区の北辺西寄りに位置する東西1間(3.3m)、南北2間(3.6m)以上の南北棟である。桁行(南北)方向の柱間は6尺等間、梁間(東西)方向の柱間は11尺である。梁間1間の建物、もしくは妻中央柱の柱穴が浅く削平されたものと考えられる。柱穴は一辺30cmの方形である。

SA 1355 (PLAN 5) Q地区

十三坪地区の東南に位置し、十三坪を東西に2分する道路(SF 1320)の西側に建ち、十三坪の西半の宅地の東を区画する南北塀である。北はSA 1370から始まり、南は発掘区のさらに南に続くものと思われる。北から7間分を検出し、南方は後世の削平のため検出できなかった。柱間はおよそ5.5尺等間、北から6間目のみを8尺としており、この位置が西側の宅地への出入口と考えられる。柱穴は円形・方形とまちまちで、大きさも一辺20cm~60cmと不揃いである。SA 1355はSB 1324の北妻柱と重複し、SB 1324より新しい。

SA 1370 (PLAN 5・7; PL. 6) Q地区

十三坪地区の中央に位置し、SA 1371とおなじく、十三坪を北から4分する位置に建つ東西塀である。東はSA 1430Aから始まり西に7間分を検出した。柱間は6尺または6.5尺、東から5間目のみを8尺とする。柱間の広い部分は、塀の南北の宅地間の通路と考えられる。柱穴の形状は不揃いで、大きさは一辺40cm~1mである。

SA 1371 (PLAN 7; PL. 6) Q地区

十三坪地区の中央に位置し、SA 1370の西端から少し北にずれて始まり、発掘区の西に延び、十三坪を北から4分する位置にある東西塀である。12間分を検出し、柱間は6尺等間、東から7間目と8間目のみを8尺とする。柱間の広い部分は、SA 1371で南北に分割される宅地間の通路と考えられる。柱穴は、一辺40cm~60cmで形状は不揃いである。

SA 1399 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の西北に位置する南北塀である。十三坪を東西に2分し、さらに南北に4分した横長の1/8町の敷地を、さらに東西に2分する位置に建つ。柱間は4尺~5.5尺で、5間分を検出した。この塀を南に延長すると井戸(SF 1385)上にあたり、SA 1490・SA 1371間を完全に塞いでいたとは考え難い。柱穴は小さく、一辺30cmの方形または円形である。SB 1403と重複し、SA 1399は、SB 1403より新しい。

SA 1410 (PLAN 4) Q地区

十三坪地区の東辺北寄りに位置する南北塀である。十三坪を東西に2分する道路(SF 1320)の東側に建ち十三坪東半の宅地の西を区画する。北は坪境小路南側溝の南から始まり7間分を検出した。柱間は北から、7尺・7尺・6尺・4尺・6尺・6尺・6尺と不揃いである。柱穴

は約70cmの方形で、他の塀に比べ形状・規模とも整っている。

SA 1430 A・B (PLAN 5) Q地区

十三坪地区の東辺中央に位置する南北塀である。SA 1355 とはやや柱筋をずらして北へ延び十三坪西半の宅地の東を区画する。南は SA 1370 の東端から始まり、北は SA 1490 まで延びる

- * ものと考えられ、南から12間分は検出したが、北方は後世の削平のため柱穴は検出できなかった (SA 1430A)。塀は1度つくり替えがあり、柱位置を北へ2尺ずつずらしている (SA 1430 B)。柱間は5尺から5.5尺で、両者とも南から7間目のみは9尺である。西の宅地から坪内の南北道路 (FS 1320) にひらく出入口と考えられる。柱穴は一辺 40cm~50cmの不整形で、一部の柱穴に柱痕跡を残す。

* SA 1434 (PLAN 6) Q地区

十三坪地区の北辺西寄りに位置する南北塀である。十三坪の西半の宅地を東西におよそ2分する位置にあり、5間分を検出した。柱間は6尺等間、中央間のみ8尺である。SB 1480・SB 1405 と重複し、双方より新しい。

SA 1527 (PLAN 4) P地区

- * 十四坪南区の東南隅に位置する東西塀である。坪境道路 (SF 2000) の北側溝 (SD 1500) 心から北に1.8mの位置にあり、十四坪東半の南を区画する。西は十四坪を東西に2分する道路 (SF 1970) の東から始まり、7間分を検出し、東はさらに発掘区の東へ続く。柱間は7尺から10尺と不揃いである。

SA 1536・1646 (PLAN 3・4) O・P地区

- * 十四坪南区東方と十四坪北区南西隅に位置する南北塀である。十四坪を東西に2分する道路 (SF 1970) の東に建ち十四坪東半の宅地の西を区画する。南は SA 1527 の西端のやや西から始まり、北は十四坪北区の南から13.5mの地点で終わる。十四坪南区で14間分、十四坪北区で6間分を検出した。柱間は6尺等間、十四坪北区の北から4間目のみを14尺とする。この位置がSF 1970 から東の宅地への入口と推定される。柱穴は40cm~80cm、形は不揃いで、一部の柱掘形に柱根が残る。

SA 1542 (PLAN 6) P地区

十四坪南区南辺の西半に位置する東西塀である。十三坪・十四坪間の坪境小路 (SF 2000) の北に位置し、十四坪西半の区画の南を画する。東西19間分を検出したが、塀は一直線にはならず、SD 1538 の西の位置でSD 1538 に沿って1間(1尺)分北にずれる。この位置から西

- * では13間を検出し、柱間は5尺~7尺と不揃いである。北へずれる位置から東では6間を検出し、柱間は6尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いで、比較的小きな柱穴が多い。

SA 1548 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の西南に位置する南北塀である。SF 1970 によって東西に2分される十四坪の西半をさらに東西に2分する位置に建つ。南は SA 1541 のやや北から始まり、12間分を検出し

- * た。柱間は6尺~9尺と不揃いである。柱穴は一辺60cm~70cmの隅丸方形である。

SA 1551 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の東辺中央に位置する東西塀である。SA 1536 の東の宅地を南北に南から8分する位置に建つ。西は SA 1536 から始まり、10間分を検出し、東は発掘区の東へ続き、柱間はお

よそ6尺等間、西から7間目のみ11尺と広く、SA 1551によって区画される南側の宅地と北側の宅地間の通路と考えられる。柱穴は30cm～80cm、形状・規模とも不揃いである。

SA 1556 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の東北隅に位置する東西塀である。SA 1536の東の宅地を南北に南から4分する位置に建つ。南北塀SA 1556、東西塀SA 1527・SA 1551とともに1/16町もしくは1/32町を形成する。東西6間を検出したが、SA 1536の柱列とは筋が通らず、SA 1536には取り付いていなかったと考えられる。柱間はおよそ6尺、西から6間目のみ15尺とし、SA 1556の南と北の宅地間の通路と考えられる。

SA 1558 (PLAN 4; PL. 13) P地区

十四坪南区の東寄りに位置する南北塀である。十四坪を東西に2分する道路の西側に建ち、十四坪西半の宅地の東を区画する。北は坪境小路北側溝(SD 1500)の心から北へ10.2mの位置から始まり、7間分を検出した。南は坪境小路北側溝のすぐ北まで延びるものと考えられるが、柱穴は検出できなかった。柱間は6尺等間、南から2間目のみは8尺とし、この間は通路であったと考えられる。柱穴は一辺50cm前後の方形または楕円形である。SB 1562と重複し、SB 1562より新しい。

SA 1571 (PLAN 4・6) P地区

十四坪南区の北辺に位置する東西塀である。十四坪を南北に4分する位置にあり、SA 1548・SA 1558・SA 1541とともに1/16町宅地を区画する。東はSA 1558の西から始まり、西はSA 1527の東で終わり、SA 1527のさらに西へは延びない。柱間は不揃いである。柱穴は一辺40cmの不整形である。SB 1582と重複し、SB 1582より新しい。

SA 1573 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の中央に位置する東西塀である。SB 1575の南に建ち、SA 1551と同様に十四坪を南北に8分する位置にある。しかし検出したのは6間分にすぎず、東をSA 1548、西をSA 1558、北をSA 1571で区画される1/16町宅地をさらに南北に2分する塀とは考え難く、SB 1575の目隠し塀と考えられる。柱間は4.5尺～6尺と不揃いである。柱穴は一辺50cm前後で、形状も不揃いである。

SA 1574 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の中央に位置する南北塀である。南はSB 1575の南側柱筋に揃い、北へ3間分を検出した。柱間は7尺等間である。SB 1575の東の目隠し塀と考えられ、SB 1575との間隔は2.7m(9尺)である。柱掘形は一辺60cmの方形で、各柱掘形に柱痕跡を残す。

SA 1647 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の西南隅に位置する南北塀である。SA 1558と同様に、SF 1970の西側に建ち十四坪の西半の宅地の東を区画する。SA 1558とは柱筋が揃わず、SA 1558より約1m東にずれ、十四坪南区と北区の間で別の塀になるものと考えられる。SA 1572-SA 1536間は約2.5m、SA 1558-SA 1536間は約3.5mである。北はSA 1536と同じ所から始まり、6間分を検出し、南は発掘区外に延びる。柱間7尺等間である。柱穴は小さく、30cm～40cmの円形である。

SA 1686 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の南寄りに位置し、SB 1690の南に建つ東西塀である。十四坪の南からおよそ

3/8の位置にあり、6間分を検出し東はさらに発掘区の東に続く。柱間は6尺等間、西から5間目のみ4尺である。柱穴は一边50cmの方形または円形である。

SA 1716 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の南方に位置する東西塀である。6間分を検出し、柱間は6尺から9尺と不揃いである。柱穴は一边30cm~70cmで、形状は不揃いである。

SA 1900 (PLAN 3; PL. 18) O地区

十四坪北区中央に位置する東西塀である。十四坪を南北に2分する位置にあり、東はSK 2001(Ⅱ期)の南から始まり、西は発掘区のさらに西へ続く。柱間、柱穴の規模・形状とも不揃いである。柱穴はSK 1942(Ⅱ期)の埋土と重複しており、SA 1900はSK 1942等の土坑群より一時期新しいと考えられる。

SD 1318・1386・1486 (PLAN 5) Q地区

それぞれ十三坪地区の東南隅・東辺中央・東北を流れる南北溝である。これらは本来坪境小路南側溝SF 1495に流れ込む1本の溝で、後世の削平のために途切れ途切れに残ったものと考えられる。各々の幅はおよそ20cm・30cm・40cmで、北方の方が残りがよく、深さは6cmから7cmである。この溝は十三坪を東西に2分する道路(SF 1320)の東側溝と考えられ、西側溝との心距離は3.0mである。また溝の東に平行する南北塀SA 1410までは90cmある。

SD 1319・1387 (PLAN 5; PL. 7) Q地区

それぞれ十三坪地区の東南隅・北辺中央を流れる南北溝である。これらも本来は坪境小路南側溝SD 1495に流れ込む1本の溝と考えられる。各々の幅は20cm~30cm・40cm~50cmで、やはり北の方が残りがよく、深さは8cmから9cmである。この溝はSF 1320の西側溝にあたり、溝の西を平行する南北塀SA 1355までは70cm、SA 1430までは90cmである。

SD 1338 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の西南を流れる東西溝である。幅は約20cm、深さは6cmである。SE 1335のすぐ南に位置し、十三坪の北からほぼ3/8の位置に当たる。1/32町宅地を区画する溝と考えられる。

* SD 1407 (PLAN 5) Q地区

十三坪地区の中央東寄りに位置する南北溝である。SA 1430に平行して流れ、南はSA 1370の北1.2mの地点から始まり、北へ10.2mを検出した。溝幅は南へ行くほど広く最大幅が1.5m、北へ行くほど細く約50cmとなる。溝の東でSE 1375の掘形と重複し、重複関係からSE 1375の古い井戸より新しく、新しい井戸より古い。したがってこの溝はSE 1375と同時存在もしくはSE 1375よりやや遅れて掘られたものと考えられる。埋土からは製塩土器および平城宮土器Ⅱ~Ⅲの土器が出土した。

SD 1440 (PLAN 4) Q地区

十三坪地区の東北隅に位置する東西溝である。西はSA 1410の東1.5mの地点から始まり、東は発掘区の東へ続く。SD 1440の北肩からSD 1495の南肩までは2.5mあり、溝幅は東方で40cm、西へ行くほど南へ広がり最大幅が2mである。柱穴との重複関係から、SB 1471・SB 1472よりは新しくSA 1473・SA 1470よりは古い。埋土から平城宮土器Ⅱ~Ⅲの土器が出土した。

SD 1495・1500 (PLAN 4・6; PL. 9・12) P・Q地区

十三坪・十四坪間の坪境小路側溝にあたる。SD1495が南側溝、SD1500が北側溝である。各々

の溝の内側にあるSD1495・SD1500に先行する南北両側溝（SD1496・SD1499）の埋土を掘って側溝がつくられている（Fig. 15～17）。溝幅は南北側溝とも約1.5m（5尺）、深さ80cmであるが、側溝の道路側の肩はなだらかな斜面となっている。おそらく地盤が軟弱なために、溝肩が崩れたものと考えられ、遺構面での溝幅はもっとも広いところで、2.4mである。南北側溝間の中心距離は6.9m（13尺）である。溝底の標高は、発掘区の東が発掘区の西より約60cm *
低く、水は西から東へ流れていたと推定される。

埋土から出土した土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅴに属するもので、溝底・埋土上層を問わず各時期の土器が出土した。埋土は廃絶時に一括して埋められた様相を示し、溝底から順に堆積した状況はみられなかった。また、埋土からは羽口片、埴輪片等の鑄造にかかわる遺物が多数出土した。 *

SD1538 (PLAN 4・6) P地区

十四坪南区の南辺中央を流れるL字状の溝である。SA1566 から西へ13.8mの位置でSD1500から北へ流れ（南北2.1m）、東に折れて東西に流れ（東西11.6m）、消滅する。溝幅は30cm～40cm、深さは15cm～20cmである。SD1500に流れ込み、奈良時代の後半まで存続しており、十四坪の南辺を画する東西堀SA1542はこの溝を避けてつくられている。 *

SD 1563・1688 (PLAN 3・4) P地区

十四坪南区の西方と十四坪北区の西南隅に位置する南北溝である。北はSA1647の北端と同じ位置から始まり、南は坪境小路北側溝（SD1500）に流れ込む。十四坪を東西に2分する道路（SF1970）の東側溝にあたり、東の宅地を画するSA1536・1646までは60cmである。溝幅は北方で40cm、南へ行くほど広くなり最大1.6mである。深さは浅く約7cmである。埋土 *
からは平城宮土器Ⅱ～Ⅴの土器とともに鋳滓が出土した。

SD 1569・1649 (PLAN 3・4; PL. 12) O・P地区

SD1563・SD1688 同様十四坪南区から北区にかけて検出した南北溝である。SF1970の西側溝にあたり、北はSD1688と同様発掘区の途中で終わる。溝は北へ行くにしたがい東に寄り、東側溝との中心距離は南では2.1mであるが、北端では1.5mである。西の宅地を画するSA1647 *
までは約50cm、SA1558までは約60cmである。溝幅も東側溝と同様に南方ほど広く80cm、北方では40cmである。深さは約10cmである。埋土からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。

SE 1305 (PLAN 5; PL. 4・22) Q地区

十三坪地区の東南隅に位置する井戸。掘形は、平城宮土器Ⅲの土器および製塩土器を含む土坑(SK1307)より古い。掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。 *

SE 1315 (PLAN 7; PL. 5・22) Q地区

十三坪地区の西南隅に位置する井戸。掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。 *

SE 1335 (PLAN 7; PL. 5) Q地区

十三坪地区の西辺南方に位置する井戸。掘形からは平城宮土器Ⅱの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。

SE 1375 (PLAN 5 ; PL 6・22) Q地区

十三坪地区の中央東寄りに位置し、SA1370・SA1430によって囲まれる区画の東南隅にあたる井戸。井戸はつくり替えがあり、井戸枠が残る新しい井戸の掘形の下層に、古い井戸の掘形を検出した。古い井戸の東ではSK1375と重複し、古い井戸の掘形はSK1407に破壊され、新しい井戸の掘形はSK1407を破壊しているため、井戸つくり替えの間に時間の経過があったことがわかる。古い井戸の掘形からは平城宮土器Ⅲの土器が出土し、新しい井戸の掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が、井戸枠内からは平城宮土器Ⅴの土器が出土した。

SE 1385 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の中央西寄りに位置する。東西塀 SA1371 のすぐ北にあり、十三坪の西半を南北にほぼ2分する線上にある井戸。掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅴの土器が出土した。

SE 1530 (PLAN 4 ; PL. 23) P地区

十四坪南区の東南隅に位置する井戸。SA 1537 のすぐ北にあたる。SA 1527・SA 1536・SA 1551によって囲まれる敷地が1/32町とすると、SE 1530は宅地の東南隅に位置することになる。SE 1530はⅠ・Ⅱ期の築地(SA 1528)の位置にあり、築地が完全に崩壊し、代わりにSA 1527が建てられたときに掘られたと考えられる。井戸掘形からは平城宮土器ⅠまたはⅡの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器ⅢからⅤの土器が出土した。

SE 1550 (PLAN 6 ; PL. 23) P地区

十四坪南区の西南に位置する井戸。SA1548のすぐ西にあたり、SA1548より西の区画の東南隅に近い位置である。井戸枠内からは平城宮土器Ⅴの土器が出土した。

SE 1555 (PLAN 4 ; PL. 23) P地区

十四坪南区の東北に位置する井戸。SA1556のすぐ南にあたる。SA1551・SA1536・SA1556によって囲まれる宅地が1/32町とすると、SE 1555は宅地の東北隅に位置することになる。掘形からは平城宮土器Ⅱの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅲ～Ⅴの土器が出土した。

* **SE 1560** (PLAN 4 ; PL. 24) P地区

十四坪南区の北辺中央に位置する井戸。SA1571・SA1558・SA1548・SA1542によって囲まれる1/16町宅地の東北隅に位置する。掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅴの土器が出土した。

SK 1463 (PLAN 4・5) Q地区

* 十三坪地区の東北に位置する東西2.3m、南北1.2mの不整形土坑である。埋土からは平城宮土器Ⅲ～Ⅳの土器と、平城宮瓦編年Ⅲの軒丸瓦が出土した。

SK 1513 (PLAN 6 ; PL. 9・12) P地区

坪境小路(SF2000)上に位置する東西2.7m南北1.8mの楕円形土坑である。深さは約8cm、埋土には大量の炭化物を含む。埋土からは平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

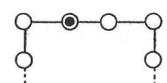
* **SK 1824** (PLAN 3 ; PL. 18) O地区

十四坪北区の中央に位置する南北1.4m東西1.35mの不整形土坑である。SK1824は、SB1820・SB1830と重複し、双方より新しい。埋土には大量の炭を含み、鞆羽口片5片、埴塀片16片、不明土製品1片、鋳滓5点の鑄造関係遺物が出土した。

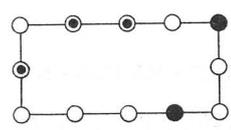
D IV期の遺構

IV期の全体の様相はIII期と変化がない。III期の遺構のうち、建物12棟、塀19条が存続し、あらたに建物11棟、塀4条が建てられる。井戸は1基が廃絶し、1基が、新たにつくられる。

SB 1312 (PLAN 7) Q地区

 十三坪地区南辺中央の位置に、東西棟と思われる建物の北側柱列と梁行1間 * を検出した。建物の規模は東西3間(3.1m)南北1間(1.5m)以上である。桁行(東西)方向の柱間は3間のうち中央の間がやや狭く5尺、両脇間が6尺である。梁行(南北)方向の柱間は、検出した1間が5尺である。柱穴は一辺50cmの不整形である。柱穴の重複関係から SB 1312は、SB 1309・SB 1313より新しい。

SB 1326 (PLAN 7; PL. 4) Q地区

 十三坪地区南辺中央に建つ東西4間(7.8m)、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東2間が6尺等間、西2間が7尺等間である。梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。穴柱は一辺約80cmの方形で、深さは55cm~70cmあり、2箇所に柱根を残す。一つは東北隅柱(Fig. 33)で直径約22cm、もう一つは南側柱で直径約15cmであり、隅柱が側柱より太くなっている。柱穴の重複関係から SB 1325・SB 1327より新しい(Fig. 22参照)。柱穴からは平城宮土器IIもしくはIIIの土器が出土した。

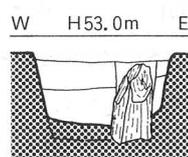
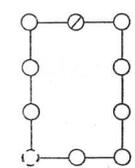
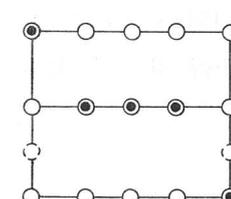


Fig. 33 SB 1326の柱根

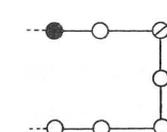
SB 1362 (PLAN 7) Q地区

 十三坪地区の中央南寄りに位置する東西2間(3.6m)、南北2間(5.4m)の南北棟である。桁行(南北)方向、梁間(東西)方向とも柱間は6尺等間である。柱穴は小ぶりで、柱筋の揃いもよくない。西南隅柱は後世の土坑で破壊され、検出できなかった。

SB 1391 (PLAN 7) Q地区

 十三坪地区中央北寄りに建つ東西4間(7.8m)、南北3間(6.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から7尺・6尺・6尺・7尺、梁間(南北)方向では身舎柱間が6尺等間、北庇の出が10尺である。梁行の柱間より庇の柱間が大きい形式は、規模が少し異なるものの SB 1380と共通する。身舎の柱穴は一辺60cm~70cmの不整形で、庇の柱穴は、身舎よりひとまわり小さく一辺約40cmの不整形である。柱穴の重複関係から SB 1391は、SB 1390・SB 1415より新しい。柱穴からは平城宮土器IIまたはIIIの土器が出土した。

SB 1406 (PLAN 7) Q地区

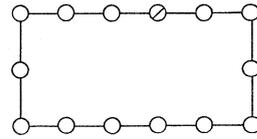
 十三坪地区の中央西辺に位置する東西2間(4.2m)以上、南北2間(3.6m)の東西棟である。桁行(東西)方向の柱間は東から8尺・6尺、梁間(南北)方向の柱間は6尺等間である。柱穴は規模・形状とも不揃いでおよそ一辺30cm~60cmである。柱穴の重複関係から SB 1406は SA 1422より新しい。

SB 1478 (PLAN 6 ; PL. 11) Q地区

十三坪地区の北辺 SB 1480 の東側に位置する東西 5 間 (8.7m)、南北 2 間 (4.5m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は東 3 間が 6 尺等間、西 2 間が 5.5 尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は 7.5

* 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm ~ 60 cm の不整形である。柱穴の

重複関係から SB 1478 は SB 1475・SB 1476・SB 1377 より新しい。柱穴からは平城宮 IV もしくは V の土器が出土した。



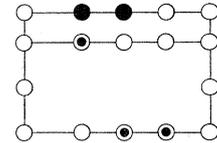
SB 1531 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の東南隅に位置し、十四坪の東半の区画に建つ。東西 4 間

* 東西 4 間 (7.2m)、南北 3 間 (4.8m) の北縁をもつ東西棟である。身舎の桁行方向の柱間は、東 3 間が 5.5 尺、西 1 間が 7.5 尺、梁間 6 尺等間、縁の出が 4 尺である。柱穴は一辺 80 cm の方形で、北柱列の 5 個の柱穴

は小さく、一辺 40 cm の方形である。身舎との柱間も小さく、縁東の柱穴と考えられる。南側柱東から 2 番目及び 3 番目、北側柱西から 2 番目に柱痕跡をとどめ、縁の西から 2 番目、3

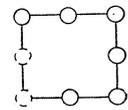
* 番目に柱根を残す。柱穴からは平城宮土器 III の土器が出土した。



SB 1544 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の南辺西寄りに位置する東西 2 間 (3.6m)、南北 (3.3m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は 6 尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は 5.5 尺等間である。柱穴は一辺 40 cm ~ 50 cm の方形である。柱穴の重複関係から SB

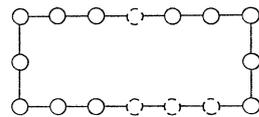
* 1547 は、SB 1545 より新しい。



SB 1690 (PLAN 3) O地区

十四坪北区南寄りに位置し、SB 1760 (III期) を桁行 6 間に延ばし、北側柱筋はそのまま西にずらして建て替えた建物である。東西 6 間 (9m)、南北 2 間 (3.6m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間

* は 5 尺等間、梁間 (南北) 方向の柱間は 6 尺等間である。柱掘形は一辺 30 cm ~ 50 cm の不整形である。柱穴の重複関係から SB 1690 は、SB 1760 より新しい。

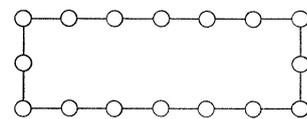


SB 1691 (PLAN 3) O地区

SB 1690 の桁行柱間を 6 尺にし、北側柱筋はそのままやや東にずらして建て替えた建物である。東西 6 間 (10.8m)、南北 2 間

* (3.6m) の東西棟である。柱間は桁行 (東西) 方向、梁間 (南北)

方向とも 6 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm の楕円形である。柱穴からは平城宮土器 II ~ IV の土器が出土した。



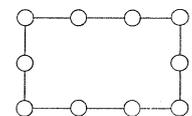
SB 2081 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北辺西寄りに位置する東西 3 間 (6.0 m)、南北 2 間 (3.6

* m) の東西棟である。桁行 (東西) 方向の柱間は東から 6 尺・7 尺・7 尺、

梁間 (南北) 方向の柱間は 6 尺等間である。柱穴は一辺 50 cm から 60 cm の

隅丸方形である。SK 2079 (平城宮土器 II の土器を含む)・SK 2001 と重複し、双方より新しい。



SA 1372 (PLAN 7; PL. 6) Q地区

十三坪地区の中央に位置し、SA 1371 のすぐ北 (60 cm) に平行する東西塀である。4 間分を検出し、柱間は 6 尺等間である。柱穴は 1 辺 40 cm~60 cm の不整形である。SA 1371 の部分的改修と考えられる。

SA 1473 (PLAN 4; PL. 10) Q地区

十三坪地区の東北隅に位置する東西塀である。坪境小路南側溝 (SD 1495) 心から南に 3.0m の位置にあり、前時期の築地塀 (SA 1485) の南に建てられたと考える。西は SF 1320 の東から始まり、8 間分を検出し(うち柱穴 3 個検出できず)、東はさらに発掘区の東へ続く。柱穴は一辺およそ 60 cm の方形である。SA 1473 は SB 1472 と重複し、柱穴の重複関係から SA 1473 は SB 1472 より新しい。

SA 1541 (PLAN 6) P地区

十四坪南区の南辺に位置する東西塀である。坪境小路の北側溝 (SD 1500) 心から北に 1.5m の位置にあり、十四坪の西半の宅地の南を画する。東は L 字形の溝 SD 1538 の東から始まり、10 間分を検出し、西は発掘区のさらに西に延びる。柱間はおおよそ 6 尺等間、東から 6 間目のみ 15 尺とし、この位置が通路に当たるものと考えられる。この塀は前時期に造られた SA 1542 の SD 1538 より西の部分を、南にずらしてつくり替えたものと考えられる。柱穴は一辺 40 cm~70 cm の方形もしくは楕円形で、一部に柱痕跡を残す。

SE 1360 (PLAN 5) Q地区

十三坪地区の中央東寄りに位置し、SA 1355・SA 1370 によって囲まれた区画の東北隅にあたる。他の井戸にくらべ掘形・井戸枠ともひとまわり小さい。掘形からは平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土し、井戸枠内からは平城宮土器Ⅴの土器が出土した。

SK 1356 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区中央南寄りに位置する東西 1.9m 南北 7.0m の南北に長い大規模な土坑である。北方の南北 3m 分が一段深くっており、深さは 50 cm である。南は浅く、深さ 17 cm である。埋土には炭を混え、平城宮土器Ⅲの土器が出土した。SB1344・SB1362 と重複し、双方より新しい。

SK1361 (PLAN 5・7; PL. 4) Q地区

十三坪地区の中央に位置し、SA1370 のすぐ南にあたる。東西 8.0m 南北 2.3m の隅丸長方形の大規模な土坑である。南部分(東西 5.7m 南北 1.2m)が一段深く、深さ 30cm、その回りは浅く深さ 15 cm である。埋土には炭化物を含み、製塩土器とともに平城宮土器Ⅲ~Ⅳの土器が出土した。

SK 1373 (PLAN 5; PL. 6) Q地区

十三坪地区の東辺中央に位置する東西 3m、南北 1.8m の不整形土坑である。深さは約 18cm である。埋土からは平城宮土器Ⅴの土器と平城宮瓦編年Ⅲの軒平瓦が出土した。

SK 1397 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の中央北寄りに位置する東西 1.1m 南北 1.2m の円形土坑である。SK 1397 は SB 1415 と重複し、SB1415 より新しい。埋土には大量の炭化物を含み、ミニチュア土器および平城宮土器ⅣもしくはⅤの土器が出土した。

SK 1437 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の北西に位置する東西 55cm 南北 55cm の小規模土坑である。深さ 13cm で、埋土に焼土を含み、平城宮土器ⅣもしくはⅤの土器が出土した。

SK 1479 (PLAN 7) Q地区

- * 十三坪地区の北辺西寄りに位置し、坪境小路 (SF2000) のすぐ南に位置する不整形土坑である。東西 1.9m, 南北 90cm, 深さは 15cm である。埋土からは製塩土器および大量の土器が出土し、平城宮土器ⅣもしくはⅤの土器が含まれていた。SK1479 は SB1480 と重複し、SB1480 より新しい。

SK 1491 (PLAN 4; PL. 9) P・Q地区

- * 坪境小路 (SF2000) 上に位置する楕円形土坑である。東西 2.9m, 南北 0.9m, 深さは 27cm である。埋土からは埴塼片、製塩土器および平城宮土器ⅡまたはⅢの土器が出土した。

SK 1503 (PLAN 6; PL. 9) P・Q地区

坪境小路 (SF 2000) 上に位置する不整形土坑である。東西 2.8m, 南北 1.2m, 深さは約20cm である。埋土からは埴塼片および平城宮土器ⅣからⅤの土器が出土した。

- * SK 1506 (PLAN 4; PL. 9) P地区

坪境小路 (SF 2000) 上に位置する不整形土坑である。東西 2.5m, 南北 1.5m, 深さは 22cm である。土坑西辺には炭化物が大量につまっております。大量の製塩土器および平城宮土器Ⅲの土器が出土した。

SK 1508 (PLAN 4; PL. 9) P・Q地区

- * 坪境小路 (SF 2000) 上に位置する円形土坑である。東西 2.8m, 南北 2.8m, 深さ 20cm である。埋土からは平城宮瓦編年Ⅳの軒丸瓦が出土した。

SK 2036 (PLAN 2) O地区

十四坪北区の北方中央に位置する土坑である。東西 4.7m, 南北 4.5m の整った方形をしている。底は凸凹で中心部分が最も深く、約 30cm である。埋土は大きく2層に分かれ、上層で

- * は土器・炭化物を多く含み、下層では余り炭化物を含まない。埋土からは、鞆羽口片 6 片、埴塼片 28 片、砥石 2 点、鋳滓 7 点、不明銅製品 1 点の鑄造関係遺物が出土した。土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅳのものが出土した。

この土坑は、井戸 (SE2020) の北に位置し、井戸とは南北溝でつながれていた形跡がある。また他の土坑とは異なり、整った方形をしており、工房に関連する施設とも考えられるが、詳

- * 細は不明である。

E その他の遺構

SK 1304 (PLAN 5; PL. 7) Q地区

十三坪地区の東南隅に位置する東西0.3m 南北 6.0m 以上の大規模な長方形土坑。埋土は上層に炭と炭化物を含

- * む層 (約 10cm), 下層に炭を含まない粘質土の層がある。深さは最深部で 60cm (Fig. 34)。

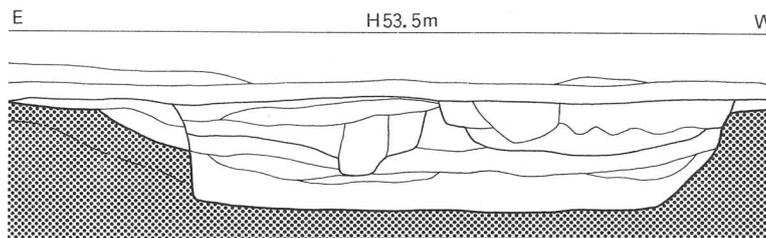


Fig. 34 SK 1304 断面図

SK 1316 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区の南西隅に位置する東西 60cm 以上、南北 55cm の楕円形土坑である。埋土からは大量の製塩土器が出土した。この土坑の西端は発掘区西外方に出る。

SK 1347 (PLAN 7) Q地区

十三坪地区西辺南寄りに位置する東西 1.1m、南北 0.6m の楕円形土坑である。埋土からは大量の製塩が出土し、また平城宮土器ⅡもしくはⅢの土器が出土した。

SK 1510 (PLAN 4 ; PL. 9) P地区

坪境小路 (SF2000) 上に位置する東西 2.1m、南北 1.8m の楕円形土坑である。埋土から和同開珎が出土した。

SK 1775 (PLAN 3 ; PL. 19) O地区

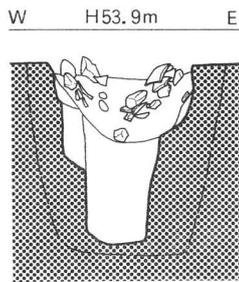


Fig. 35 SK 1775 断面図

十四坪北区の南方中央に位置する円形土坑である。東西・南北とも 80 cm、深さは 40 cm である。断面は、上部がすりばち状を呈し、下部は垂直に落ちる。埋土は炭混じりの暗褐色土で、石・瓦片を大量に含む (Fig. 35)。

SK 1819 (PLAN 3) O地区

十四坪北区の中央に位置する南北 1.1m、東西 40cm の楕円形土坑で、湾曲羽口が出土した。

SK 1831 (PLAN 3) O地区

十四坪北区中央東寄りに位置する東西 80 cm、南北 60 cm の楕円形土坑である。埋土から平城宮土器Ⅱに属する土器が出土した。

SK 1910 (PLAN 2) O地区

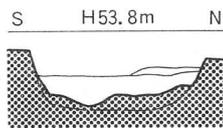


Fig. 36 SK 1910 断面図

十四坪北区の中央に位置する不整形土坑である。東西 0.7m、南北 1.1m、深さは約 20cm で、底面は凸凹である。埋土からは鞆羽口片 6 片、埴塼片 1 片、不明土製品 2 片の鑄造関係遺物が出土した (Fig. 36)。

SK 1964 (PLAN 4) P地区

十四坪南区の東南隅に位置する東西 0.65m、南北 0.3m の小規模土坑である。埋土からは大量の製塩土器が出土した。

SK 1965 (PLAN 4) P地区

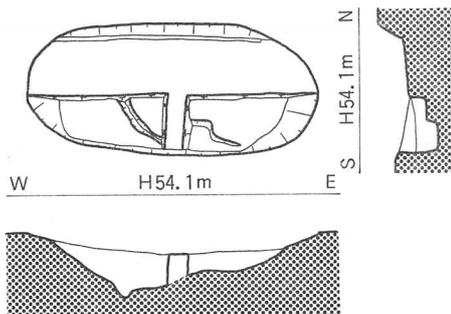


Fig. 37 SX 1552 断面図

十四坪南区の東南に位置する東西 2.7m、南北 3.0m の不整形土坑である。埋土には大量の炭化物を含み、多数の製塩土器とともに平城宮土器Ⅲの土器が出土した。また、新型式の軒丸瓦が出土した。

SX 1552 (PLAN 4 ; PL. 15) P地区

十四坪南区の東辺中央に位置する東西 0.75m、南北 0.35m の小規模な楕円形土坑である。西寄り中央が最も深く (深さ 18cm) 東はなだらかな傾斜となり、最深部には幅 10cm の溝が

ある。壁面が赤褐色に焼け、内部に炭が詰まっており、この遺構は炉跡と考えられる (Fig. 37)。埋土からは鑄造に関係したと考えられる土製品が6片出土した。

F 井 戸

十三坪地区

* SE 1305 (PLAN 5 ; PL. 22) Q地区

直径 91cm の丸太をふたつに割り裂いたのち、内割りし、再度2枚合わせにしたものを井戸枠とした円形の井戸。十三坪地区の東南隅で検出。枠板の厚さは 8cm あり、井戸枠の内径は 78~80 cm である。井戸底に小円礫を厚さ 20~30 cm に敷きつめている。井戸枠を据え付けるための掘形は、東西 220cm・南北 180cm の楕円形で、深さは 226cm ある。Ⅲ期につくられ、

* 奈良時代の末期に廃絶したと考えられる。

井戸底のバラス敷きの直上から海獣葡萄鏡の破片が出土し、井戸埋土の最下層からは和同開珎2点、神功開寶1点、帯金具、鉄斧、鉄釘などが出土した。また井戸底から 100~120 cm に堆積した黒灰色粘土層には、斎串、横櫛、曲物底板などが埋っていた。この井戸と同じ位置で、ひとまわり大きな掘形が確認された。これは東西 340cm、南北 300cm の隅丸長方形の平

* 面形を呈する。SE 1305 をつくる以前にあった井戸枠を解体した際の抜取穴であろう。

SE 1314 (PLAN 7 ; PL. 5) Q地区

十三坪南辺に位置する一辺 1.3m の方形縦板組の井戸。掘形は直径 1.8m 以上の不整形。近代の井戸である。

SE 1315 (PLAN 7 ; PL. 22) Q地区

* 十三坪地区西南隅で検出した、内法一辺 73~75 cm の、縦板組み横棧どめ方形井戸である。井戸枠は、縦板を横板と横棧6段で内側から支える構造をとる。井戸底に接して横板を、底から 80cm の位置に相接する横棧2段、120cm に横棧1段、150cm に相接する横棧2段をわたす。横板、横棧ともに、部材の両端を凸形あるいは凹形につくって組み合わせる目ちがい柄組み (Fig. 38) で固定している。

* 縦板は幅 10~20cm、厚さ 2cm ほどの細長い板材を交互に重ね合わせ、さらにその裏に1列、合わせて三重にメバリ状に重ねている。裏の1列は長さ1m前後の縦板を上下に重ねているが、ここに使われている板材には目ちがい柄の切り欠きがあり、横板井籠組みの井戸枠を転用したものであることがわかる。方形井戸枠の方向は、北で10度東に偏している。遺構検出面から井戸底までは 250cm ある。井戸枠の掘形は東西 270cm、南北 260cm の隅丸方形の平面

* 形で、井戸枠はそのほぼ中央に設置されている。Ⅲ期につくられ、奈良時代の末期に廃絶。

井戸底 120cm の厚さに堆積した黒灰色粘土層には、多くの土器や瓦片とともに斎串3点、和同開珎、神功開寶、鈴が埋っており、他に枠内から大型砥石や鑄造工具の鉄匙、鉄鉗、それに合計 2.87 kg の良質の木炭片も出土している。この木炭は、地下水を濾過し浄化するために井戸底に敷きつめられたものとみられる。

* SE 1329 (PLAN 7) Q地区

十三坪南辺の一辺 1.1m の方形縦板組の近代の井戸。掘形は直径一辺 2.4m の円形。

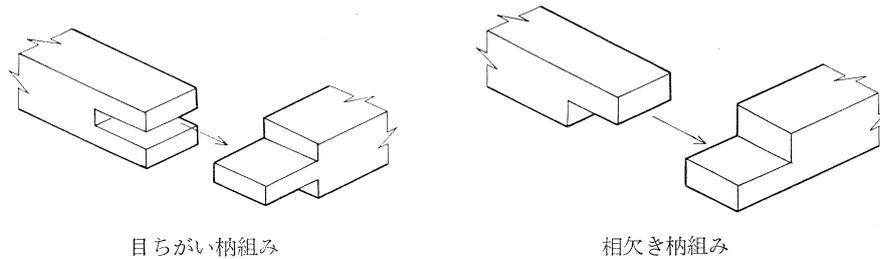


Fig. 38 井戸枠横棧の組み方

SE 1332 (PLAN 7) Q地区

十三坪南辺の一辺 1.1m の方形縦板組の近代の井戸。掘形は一辺 2.0m の不整形。

SE 1335 (PLAN 7 ; PL. 5) Q地区

十三坪地区西辺南寄りで検出した、内法一辺 82cm の縦板組み横棧どめ方形井戸である。調査の途中で崩落したため、細部の状況は不詳である。横棧は 3 段分が確認され、上から 2 段目 * には樹皮をとどめた丸太材を使っている。

掘形は東西 260cm, 南北 225cm の楕円形で、遺構検出面下 90cm で一段つけて、以下は直径約 90cm の大きさに掘り下げられている。Ⅲ期につくられ、奈良時代末期に廃絶。井戸枠内の埋土から斎串、曲物底板、把手、藤原宮式軒丸瓦6273型式が出土した。

SE 1360 (PLAN 5 ; PL. 25) Q地区 *

十三坪地区東辺中央で検出した。内法の一辺が 61cm の縦板組み方形井戸である。遺構検出面から井戸底までの深さが 80cm と、周辺の井戸に比べるといちじるしく浅く、また底の標高も 1.5m ほど高い。ただし井戸の掘形は、古い河道の堆積層であることをうかがわせる細砂層に掘りこまれており、湧水の条件はそなわっている。井戸の枠板は 25~40cm の高さを残すだけであり、縦板の支持構造などについては不詳である。井戸枠の方位は北で西に約19度偏して * いる。掘形の平面形は東西 140cm, 南北 140cm の楕円形を呈する。Ⅳ期につくられ、奈良時代末期に廃絶している。井戸内から藤原宮式軒丸瓦6274型式A種と砥石が出土した。

SE 1365 (PLAN 7 ; PL. 22) Q地区

十三坪地区中央東南寄りで検出した、内法一辺 77~82cm の縦板組み隅柱どめの方形井戸である。各辺とも 5~6 枚の板材を少しずつ重ねて立て、四隅の内側に直径 10~15cm の丸柱を * 立てている。この隅柱以外には縦板を直接支えるものはなく、現状では東・南・北辺が井戸内にせり出している。遺構検出面から井戸底までの深さは 224 cm ある。井戸枠の方位は、ほぼ南北方向に合っている。柱掘形は東西 210cm, 南北 240cm の整った方形の平面形であるが、遺構検出面下約 90cm で急にすぼまり、以下は直径が 140cm の円筒状に掘り下げられている。Ⅰ期につくられたと考えられ、奈良時代を通じて存続していた。井戸内から横櫓が出土し * た。

SE 1375 (PLAN 5 ; PL. 22) Q地区

十三坪地区東辺中央で検出した、内法一辺 66cm の上下 2 段構造をとる方形井戸である。井戸底から 100cm までは横板組みで、幅 20~30cm の横板を 4 段積みあげ、裏側に薄い縦板を一重にあてがっている。上段は縦板組み隅柱どめ構造で、下段の横板の上面に隅柱を置き、縦 * 板は下段の横板の裏側に下端をさしこむようにして 2~3 重に並べ立てている。なお横板のう

ち北辺の最上段には、多足机の天板が転用されていた。方形井戸枠の方向は北で東に約12度偏している。掘形は直径 210~230cm の楕円形の平面形を呈し、井戸底から 1m ほどの範囲は急に狭くなっている。IV期につくられ、奈良時代末期まで存続した。

なお、この井戸の掘形と同じ位置で、ひとまわり大きな掘形が重複している。平面形は東西

- * 300 cm, 南北 260 cm の方形である。

SE 1385 (PLAN 7; PL. 23)

十三坪地区中央西寄りで検出した、内法一辺が東西 96cm, 南北 98cm の縦板組み横棧どめ方形井戸枠である。一辺あたり 6~7 枚の縦板を立てて、横板で内側から支える。縦板の裏側には厚さ 5mm ほどの薄い板をあてて、目地をふさいでいる。横棧は井戸底から 35cm の位置

- * に一段だけ残り、7×5cm の角材を目たがい柄で枠組みしている。井戸枠の方向はほぼ南北に合っている。遺構検出面から井戸底までの深さは 191cm。掘形は直径 280cm 前後の不整形円の平面形で、底の部分は井戸枠がちょうど収まる程度の大きさに狭められている。III期につくられ、奈良時代末期まで存続した。

井戸内の堆積層から和同開珎と神功開寶が各 1 点、斎串、刀子の柄、鞆羽口それに6225型式

- * A種・6304型式A種、モモの種子、クリの種子などが出土している。

SE 1413 (PLAN 7) Q地区

十三坪の北辺に位置する 13枚からなる桶板を組んだ直径 1.3m の円形井戸。掘形は、直径 1.4m の円形。近代の井戸である。

SE 1488 (PLAN 6) Q地区

- * 十三坪の北辺に位置する一辺 1.3m の方形縦板組みの井戸。掘形は、直径 2.0m の円形。厚板を並べて蓋をしている。近代の井戸である。

十四坪地区

SE 1530 (PLAN 4; PL. 23) P地区

十四坪南区東南隅で検出した、内法一辺が 68~72cm の縦板組み横棧どめ方形井戸である。

- * 上下 2 段構造になっており、井戸底から 180cm の高さまでは、幅が 35~50cm の板材を一辺あたり 2 枚ずつ立て、井戸底から 150 cm 以上では、下段の井戸枠の裏側に縦板を重ねる。横棧は井戸底に接する位置と、底から 115cm, 150cm の 3 箇所にある。横棧には 5cm 角の角材が使われ、一番上の棧が目たがい柄、他の 2 箇所が相欠き柄組み (Fig. 38) である。

井戸枠の方位はほぼ南北に合っている。遺構検出面から井戸底までの深さは 235cm ある。

- * 掘形は東辺が調査区の東に続くが、南北 190cm, 東西 190cm 以上の長楕円形の平面プランをもち、底から 1.1m 以下の範囲は東西 80cm, 南北 120cm ほどに狭くなる。III期につくられ、奈良時代末期に廃絶している。井戸内から斎串、鉄釘、銅板それにモモの種子 146 点、その他の種子 29 点が出土した。

SE 1550 (PLAN 6; PL. 23) P地区

- * 十四坪南区西南隅で検出した、内法一辺が 68cm の方形井戸である。上下 2 段構造で、底から 190 cm までは横板井籠組みの枠で、横板を 9 段に組みあげている。このうち南辺の、底から 3 段目の横板には、外側 (裏側) に墨書の習書が残されていた (PL. 51-2)。上段の井戸枠は下端近くが残るだけだが、下段の横板組み枠の最上部の外側に、一辺あたり 2 枚の縦板を立て

て、下端の内側から横棧で支えている。この上段の縦板組み井戸枠は、後補のものであり、修復に際して設置されたものとみられる。井戸枠の方向はほぼ南北に合う。井戸底までの深さは、遺構検出面から 238 cm ある。Ⅲ期につくられ、奈良時代末期まで存続している。掘形は東西 200cm、南北 251cm の平面規模で、東壁は垂直に、西壁は斜めに掘り下げられている。

井戸底に堆積した厚さ 30cm の暗灰色砂質土から、和同開珎、鍔帯金具、砥石、青銅の鉞、* 錐の柄が出土し、その上の厚さ 10cm の粘土層からは、刀子が出土した。その他に井戸内埋土の中からは齋串、横櫓、軒丸瓦、モモの種子 170 点、梅やクルミの種子 6 点などが出土した。また掘形の中の、底から 30 cm の位置に、井戸枠の裏側に接するように、2 点の杓子形木製品が埋っていた。

SE1550 の西 2m に、井戸枠を抜き取り、埋め立てられた穴がある。その深さは 170cm で、* SE1550 の掘形よりも 70cm ほど浅い。

SE 1555 (PLAN 4 ; PL. 23) P 地区

十四坪南区北東隅で検出した、上下 2 段構造の方形井戸である。下段は井戸底から 265 cm の高さまでで、内法一辺が 65cm の縦板組み横棧どめの井戸枠である。縦板は各辺とも 2～3 枚の長大な板材を隙間なく並べ、東辺では 2 枚の縦板の目地をふさぐために、裏に薄い縦板を* あてがう。縦板の長さはいずれも 265cm 前後で、幅の広いものは 50cm を超す。横棧は底から 10cm と 150cm の 2 箇所にある。

上段の井戸枠は、下段の井戸枠の上端に接して、その外側に据えている。縦板組み隅柱横棧どめの構造で、内法一辺は 94cm ある。隅柱は角材で、柄穴をうがって横棧をさしこんでいる。井戸枠の方向はほぼ南北方位に合っている。井戸底の深さは、遺構検出面から 350cm あ* る。掘形は東西 235cm、南北 265cm で、遺構検出面下 90cm から急に狭くなり、底では井戸枠がちょうど取まるくらいの大きさに掘られている。Ⅲ期につくられ、奈良時代末期まで存続した。

井戸底に堆積した厚さ 40 cm の灰色砂層には、厭勝銭である富本銭、和同開珎の完形品 8 点、* 万年通寶 1 点、神功開寶 2 点、ガラス玉 1 点のほか、齋串、銅製人形、横櫓 7 点など多くの遺物が埋っていた。齋串や銅製人形など明らかに祭祀に使われたものに加えて、まじないの色あいの濃い厭勝銭、単に遺失したものとは考えがたい完形の銅銭 11 点、それにこれも投げ入れられた時には完形であったとみられる横櫓 7 点などの組み合わせは、これらが一括してある種の祭祀に供されたものである可能性が強いと考えられる。

その他に井戸枠内の埋土からは、軒丸瓦 6316 型式 Kb 種、隅木蓋瓦、完形の円形曲物、モモ* の種子 53 点、栓皮の少片なども出土している。

SE 1560 (PLAN 4 ; PL. 24) O 地区

十四坪南区北辺中央で検出した、内法一辺 100 cm の縦板組み横棧どめ方形井戸。南・東・北辺は幅 35～60cm の板材を 2 枚ずつ立て、西辺は 15～20cm 幅の縦板を 5 枚並べ立てる。各* 辺とも裏側に 1～2 重に目地ふさぎの薄い板をあてがう。横棧は角材で、井戸底に接する位置に 1 段、底から 80 cm に相接して 2 段、130 cm に 1 段、合わせて 4 段が残る。横棧はいずれも目たがい柄で組まれている。井戸枠の方位はほぼ南北方向に合っている。

井戸底の深さは遺構検出面から 223cm。掘形は東西 324cm、南北 325cm の丸みをおびた方

形の平面形で底部でも東西 230cm, 南北 240cm あり, 比較的広く掘られている。Ⅲ期につくられ, 奈良時代末期まで存続。井戸内の堆積土から神功開寶, ガラス玉, 斎串 3 点, 横櫓 4 点, 曲物底板, モモの種子 206 点などが出土した。

SE 1700 (PLAN 3; PL. 24) O 地区

- * 十四坪北区中央南寄りで検出した井戸で, 上下 2 段構造の井戸枠をもつ。井戸底から 240 cm までは, 内径 50~60cm の縦板組み円形井戸枠で, 横断面が円弧形の縦板 3 枚と, 幅 16cm の板材 1 枚を, つなぎ柄で組み合わせている。この柄組みは, 縦板の側辺近くに柄穴をうがち, 長さ 40 cm ほどの 3 cm 角の棒材で相接する 2 枚の
- * 縦板を縫うようにしてつなぐという特殊な方法 (Fig. 39) で, 井戸底から 40 cm と 190 cm の 2 箇所にある。また縦板の裏側には合せ目地をふさぐ薄い板材があてがわれている。

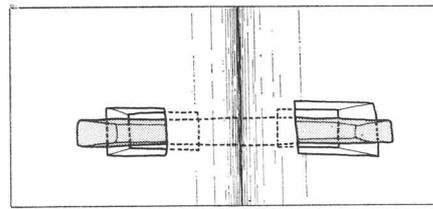
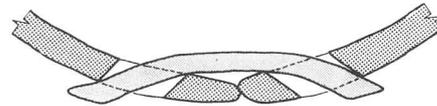


Fig. 39 SE 1700 の縦板接合法

- 底から 220cm 以上は内法一辺が 68cm の横板
- * 組み隅柱どめ井戸枠で, 横板 2 段分が残る。この部分は補修に際して新たに組まれたものである。隅柱は方形に組んだ横板組み枠の内隅にあり, 下端を尖らせた直径 10 cm ほどの丸材を 30 cm 打ち込んでいる。井戸底の深さは遺構検出面から 318 cm。井戸枠の方位はほぼ南北方向に合っている。掘形は東西 228 cm, 南北 223 cm の不整形の平面形で, 井戸底に近い 1.7 m の範囲は直径 1m と狭く掘られ, 井戸枠はその東南に寄せて設置されている。Ⅰ期につくられ, 奈良時代を通じて使用されていた。

SE 1867 (PLAN 2・3; PL. 24) O 地区

- 十四坪北区中央で検出した, 内法一辺が 70 cm の縦板組み横棧どめ方形井戸である。縦板には各辺とも長さが 210~230 cm の長大な板材を 2~3 枚並べ立て, 底から 200 cm 以上では,
- * 外側に重ねてさらに縦板を上継ぎ足している。この部分は後補である。南辺では裏に薄い縦板を 2~3 重につめるように立てている。横棧は井戸底から 35 cm, 105 cm, 170 cm, 220 cm の 4 箇所に残っており, いずれも目たがい柄組みである。方形井戸枠の方位はほぼ南北方位に合っている。遺構検出面から井戸底までの深さは 298 cm ある。掘形は東西 282 cm, 南北 268 cm で, 底部に至るまで広く掘り下げられている。Ⅰ期につくられ, Ⅱ期には廃絶している。
- * 井戸底から 105~170 cm の間に堆積した粘質土層の中から, 鈴, 馬具の一つである銅製飾金具などの金属製品や木筒 (PL. 51-1) 斎串, 曲物底板などが出土した。また井戸廃絶後の埋土から, 軒平瓦 6663 型式 M 種が出土している。

SE 1870 (PLAN 3; PL. 25) O 地区

- 十四坪北区中央西寄りで検出した, 内法一辺が 55~60 cm の方形井戸である。井戸底から 1 m
- * までは枠板が残るが, 以上の部分は抜き取られている。底に近い部分の井戸枠は, 長さ 70 cm の一辺に 2~3 枚立て並べ, 東辺以外の 3 辺では裏側に, 幅も長さも多様な板材をつめこむようにあてがっている。この中には大型曲物の底板や別の井戸で使われていた井戸枠の横板材などの転用材も含まれている。井戸底には直径 5~10 cm の小礫が約 20 cm の厚さに敷きつめら

れている。

底から 45cm 以上には縦板の裏側に横板組みの方形井戸枠を重ねており、現状では 2 段分が残る。井戸枠の方位は北で西に 5 度ほど偏している。井戸底の深さは遺構検出面から 304cm あり、井戸枠を据えつけるための掘形は井戸底から 140cm の範囲に残っている。井戸枠を抜き取るための掘形は東西 290cm、南北 285cm 以上の平面規模で、北半部に SE1880 の掘形が重複している。I 期につくられ、I あるいは II 期に廃絶した。井戸内の埋土からは斎串 5 点や曲物底板が出土している。

SE 1880 (PLAN 2・3; PL. 25) O 地区

SE1870 をとりこわしたのちに、やや北に位置を移してつくられた、内法一辺が 65×70cm の横板組み隅柱どめ方形井戸である。SE1870 よりも 150cm 浅く、井戸底の深さは遺構検出面から 162cm ある。隅柱の側面に彫りこまれた縦溝に幅 30cm 前後の横板を落しこむ構造で、横板は 4 段目までが残り、以上の部分は腐蝕して失われている。井戸枠の方位は、SE1870 と同じく北で約 5 度西に偏している。掘形は東西 240cm、南北 200cm の方形で、底に向かって少し狭くなるように掘られている。I 期あるいは II 期につくられ、II 期に廃絶した。井戸内の埋土から糸巻の横木が出土している。

SE 1917 (PLAN 2; PL. 25) O 地区

井戸枠が完全に抜き去られた抜取穴を十四坪北区中央西寄り、SE1880 の北側で検出した。掘形の大きさは、東西 262cm、南北 224cm で深さが 210cm ある。中に板材が 3 点と刀子柄、曲物底板、蓋板が埋まっていた。I 期ないしは II 期に使われていた。

SE 2019 (PLAN 2; PL. 25) O 地区

SE2019 は SE2020 がつくられる以前に同じ位置にあった井戸で、SE 2020 の掘形の東半部に重複して掘形が残る。

SE 2020 (PLAN 2; PL. 25) O 地区

十四坪地区北区北寄り中央で検出した、内法一辺が 78cm の縦板組み横棧どめ方形井戸である。調査の途中で崩れ落ちたために細部の様子はつまびらかでないが、一辺あたり 6 枚前後の縦板を並べ、10cm 角ほどの角材でつくった横棧で内側から支えている。井戸枠の方位はほぼ南北に合っている。掘形は東西 283cm、南北 266cm の方形プランを呈する。I 期ないしは II 期につくられ、奈良時代のおわりまで存続している。枠内から、堅櫛、桧扇、曲物容器、柄杓、方形の折敷、箸、モモの種子 90 点などが出土した。

SE 2070 (PLAN 2; PL. 25) O 地区

十四坪北区西辺北寄りで検出した、内法一辺が 60cm の縦板組み横棧どめ方形井戸である。縦板は、北辺と東西辺が厚さ 3cm、幅 60cm、長さ 2m に及ぶ一枚板で、南辺は 2 枚の縦板を並べて、合せ目の裏側に薄い板をあてがって目地どめとしている。横棧は井戸底から 80cm の

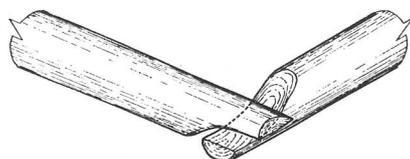


Fig. 40 SE 2070 の横棧の組み方

位置に 1 段残る。直径 5cm ほどの丸材の両端を一方から削りこんで薄くつくり、その部分を上下に重ねて方形に組んでいる (Fig. 40)。井戸底の深さは遺構検出面から 253cm ある。

井戸枠の方向はほぼ南北方位に合っている。掘形

のプランは東西 242cm, 南北 198cm の長方形で, 深さは 253cm。掘形の底全面に直径 10cm ほどの小礫を 20cm の厚さに敷きつめている。I 期につくられ, II 期のおわりに廃絶したと考えられる。井戸底から鉄鏝, 鞆羽口, 横櫛, 漆容器として使用された円形曲物や軒丸瓦 6012 型式, 6225 型式 C 種, 6308 型式, 軒平瓦 6646 型式 H 種が出土した。また掘形に軒平瓦 6646 型式

* H 種が埋っていた。

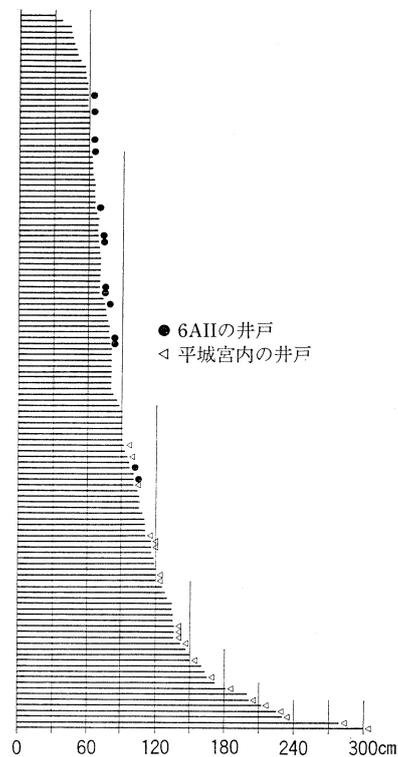
小結 一井戸の規模と構造について一

以上に記述したように, 今回の調査区から 17 基の奈良時代井戸を検出し, そのほかに同じ場所で, あるいは近接した場所で, 井戸枠の抜き取られた掘形を 5 箇所を確認した。井戸枠の規模は, 一辺が 55cm から 100cm の間にあり, 60~80cm の井戸枠が 17 例中 12 例を占めている。

- * これまで平城京内で調査された, 奈良時代に属する井戸は, 今回報告する分を合わせると 156 例に及ぶ。そのうち井戸枠が遺存するのは 112 例をかぞえる。その規模をまとめると, 一辺ないし直径の規模が 100cm 以下の井戸枠は 86 例あり, 中でも 60cm 以上 80cm 以下のものがその 63% の 54 例ある。いっぽう一辺が 120cm, 当時の尺度で約 4 尺を超える大型の井戸枠は, 僅少ではあるが, 12 の調査例がある (Tab. 4)。最大規模 (一辺 200cm) は薬師寺寺域内のものである。
- * それ以外の 11 例についてみると, 10 例までもが, いずれも 1 町以上の宅地を占有する高位の貴族, 官人など, きわめて限られた階層の住人の宅地内で検出したものである。もっとも, 大規模な宅地内の井戸がすべて大きかったのではなく, そこでは 100cm 以下の規模の井戸も同時につくられていた。
- * それに対して, 平城宮の中につくられた井戸の規模をみると, Tab. 4 に明示されるように, 多くが一辺 150cm 以上の大型井戸枠をそなえており, 京内の井戸とはいちじるしく様相を異にしている。また平城宮内では, 小さい井戸枠でも, 一辺が 90cm を下まわる例はない。

井戸枠の規模と構造の間には, かなり密接な相関関係がみとめられる。今回報告した 17 基の井戸枠には, 側板を, 割り抜いた丸太でつくるもの, 縦板を並べて円形あるいは方形につくるもの, 横板を方形に組んで積み上げるものの 3 通りの方法がみられ, 上下 2 段構造をとる井戸の中には, 縦板組みと横板組みを併用する場合もある。大多数は縦板組み構造の井戸枠であり, 横板組みだけのものは 2 例, 丸太割り抜き構造の井戸枠は 1 例にとどまる。

- * 平城京内の他の調査例をみると, 一辺が 120cm 以上の井戸枠は, ほとんど例外なく横板組み構造をとる。それに対して, 60~100cm の井戸枠では, 68 例中 43 例までが縦板組み構造で, 横板組み 13 例, 曲物 7 例, 丸太割り抜きが 2 例であり, 縦板組み構造が一般的なつくり方であったことがわかる。一辺が 59cm 以下の小規模の井戸枠は, 18 例のうち 13 例が底を抜いた曲物



Tab. 4 平城宮・京の井戸の規模 (井戸枠の一辺・直径)

を利用したものである。こうした実態からみると、大きくて深い掘形を掘削し、その中に井戸枿を組み立てるうえで、一辺が 60~100cm ほどの井戸枿が、実用的な最低限の規模であったと考えられる。今回報告する井戸はすべてその規模の範囲内に含まれる。

G 土器埋納遺構 (PL. 26)

今回の調査では、十三坪地区で 3 基、十四坪地区で 7 基、合計 10 基の土器埋納遺構を検出した。このうち、土器内に内容物を認めた 3 基 (SX1400・1535・1578) については、のちに詳述するので、あわせて参照されたい (p. 138)。

十三坪地区

SX 1310 十三坪地区の南辺ほぼ中央に位置する。径 32cm、深さ 12cm の不整形の土坑に、土師器甕 B を逆位に埋め、内部に土師器皿 C 1 枚を逆位に置く。埋納坑の底は平らで、中央南寄りに、浅い軟質の部分 (直径 10cm) がある。

SX 1400 十三坪地区の西辺ほぼ中央に位置する。南北 20cm、東西 16cm、深さ 2-6cm 前後の小土坑内に土師器皿 C 4 枚を重ねて埋納したもの。埋納坑は、別の小土坑 (柱穴ではない) に重複して掘られ、埋納坑のほうが新しい。

SX 1401 十三坪地区の西辺ほぼ中央に位置し、SX1400 のほぼ真南 2.2m にある。東西 35cm、南北 32cm、深さ 5cm の隅丸方形の土坑に土師器皿 C 5 枚以上を埋納したもの。土師器皿 C は底辺に正位で 2 枚重ね、これに接して 2 枚を正位に間をおいて据え、その上に両者にまたがるように逆位で 1 枚かぶせている。

十四坪地区

SX 1535 十四坪南区の東辺に位置する。東西 34cm、南北 21cm、深さ 18cm の隅丸方形の土坑に須恵器杯 B を埋納したもので、その内部に墨挺と和同銭が納められていた。

SX 1572 十四坪南区の中央西寄りに位置する。地山上に東西 25cm、南北 22cm の範囲に土師器皿 C を 3 枚正位に並べ、その上に土師器皿 C 2 枚を逆位に置く状況を示す。削平のため埋納坑の規模は不明である。この他に本来の位置を離れた土師器皿 C 1 枚がある。

SX 1578 十四坪南区の西半部に位置する。直径 33cm、深さ 8cm の円形土坑に土師器甕 B を逆位に埋めたもの。埋納坑底面中央やや西寄りのごく浅いくぼみ (直径 5cm、図の一点鎖線の範囲) から金箔が出土した。

SX 1579 十四坪南区北辺中央に位置する。SX1578 の西北約 1m に位置する。埋納坑は東西 29cm、南北 33cm、深さ 17cm。埋納坑の底に土師器皿 C 6 枚を正位に、壁よりに 3 枚を横位に内側に向け、その上に土師器甕を逆位にかぶせる。

SX 1589 十四坪南区の西辺に位置する。地山直上の直径 28cm 前後の範囲に、土師器皿 C 5 枚を正位で、ほぼ接するように円形に並べる。後の削平をうけ埋納坑の規模は不明である。

SX 1592 十四坪南区南辺東よりに位置する。地山直上に土師器皿 C を 3 枚正位に並べ、その上に土師器甕 (口径約 21cm) を逆位にかぶせる。後の削平のため埋納坑の規模は不明である。

SX 1593 十四坪南区の南辺東寄りに位置し、SX1592 の南東 0.5m にある。直径 35cm 前後、深さ 15cm のほぼ円形の土坑に土師器皿 C 21 枚を埋めたもの。皿 C は底面に正位で 2 枚、その上に横位に 1 枚、逆位に 13 枚 (うち 4 箇所は同位置で 2 枚ずつ重なる) をのせ、さらに壁にそって 5 枚横位 (内側向) に置く。